

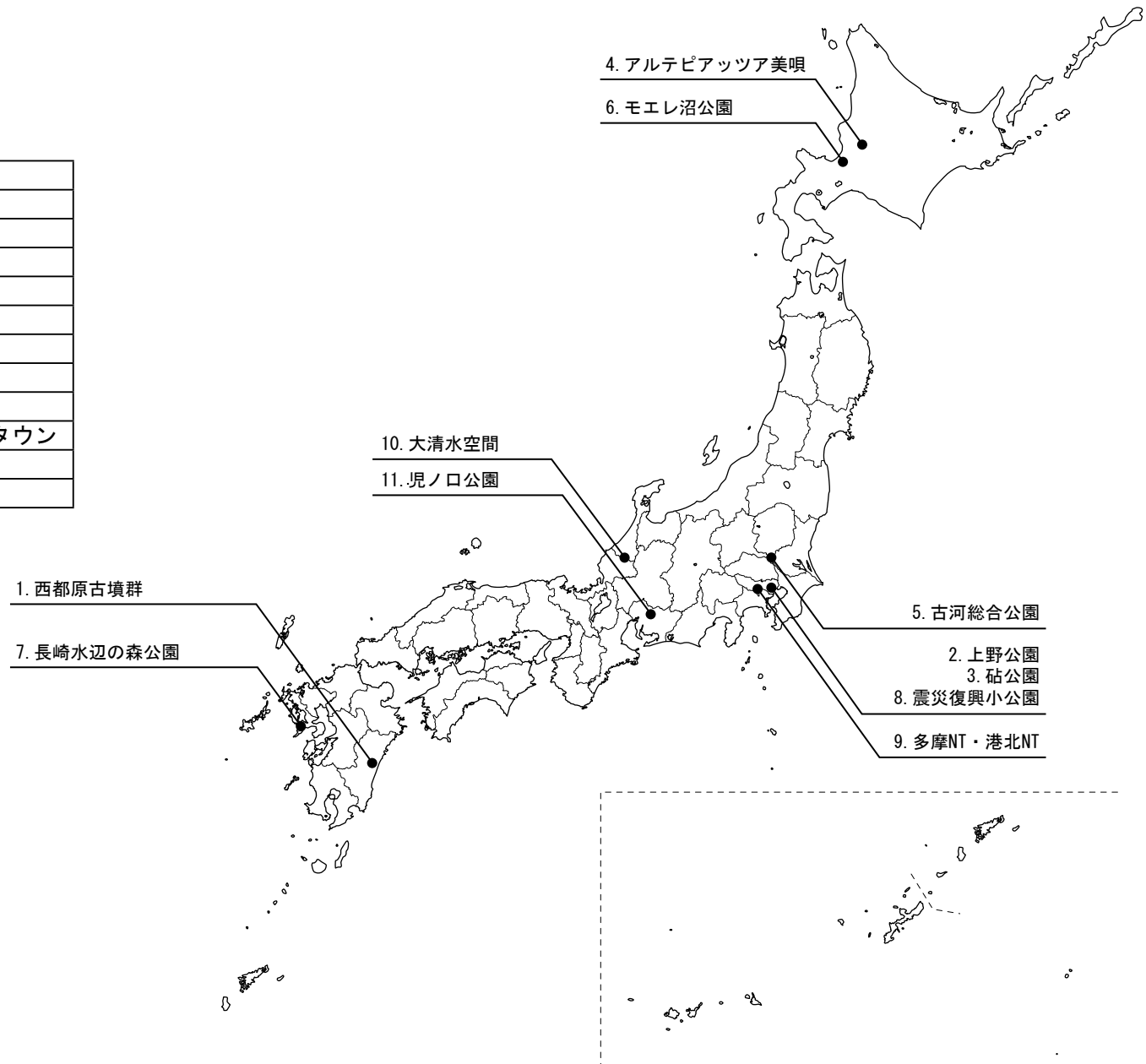
規範事例集【公園編】

目 次

事例位置図【公園編】	001
1. 西都原古墳群	
／史跡である古墳群と自然・田園が渾然一体となった公園	002
2. 上野公園	
／江戸時代の名所を踏襲して文化施設を集約した近代的な都市公園	006
3. 砧公園／グリーンベルト構想を起源に持つ自然地形を活かした緑地	010
4. アルテピアッツァ美唄／廃校を活用して創造された芸術空間	014
5. 古河総合公園	
／原風景の再生と新たな名所づくりを目指した市民の交流空間	018
6. モエレ沼公園	
／広大な敷地を活かして大胆に造形した大地のアート	022
7. 長崎水辺の森公園	
／まちと港のネットワークを強化する水辺の空間	026
8. 震災復興小公園	
／小学校と公園を組み合わせ配置した防災コミュニティ空間	030
9. 多摩ニュータウン・港北ニュータウン	
／街づくりのシステムとして計画・実践されたオープンスペース	032
10. 大清水空間	
／水の小空間のネットワークによる旧城下町の再生	036
11. 児ノ口公園／川の再生を基軸とする都市公園の新しい姿	040
参考文献リスト	044
図版出典リスト	045

事例位置図【公園編】

No.	事例対象
1	西都原古墳群
2	上野公園
3	砧公園
4	アルテピアッツァ美唄
5	古河総合公園
6	モエレ沼公園
7	長崎水辺の森公園
8	震災復興小公園
9	多摩ニュータウン・港北ニュータウン
10	大清水空間
11	児ノ口公園





【諸元】

所在地：宮崎県西都市
 面積：68.5ha（計画面積）
 施設：古代生活体験館、このはな館、西都原考古博物館 他
 事業主体：宮崎県
 管理：宮崎県

【概要】

「風土記の丘」構想は、昭和40年に現在の文化庁文化財保護部が遺跡の保存と活用を図るために創設した施策である。その目的は、各地方における伝統ある歴史的風土的特性をあらわす

古墳、城址などの遺跡等が多く存在する地域の広域保存と環境整備を図り、この地域に地方文化の所産としての歴史資料、考古資料、民族資料を収蔵、展示するための資料館の設置等を行い、これらの遺跡及び資料等の一体的な保存及び普及活動を図ることである。

これは、従来の個別の指定史跡の公有化や整備にとどまらず、遺跡等を中心とした面積16万5千㎡以上の用地を公有化等により確保することを国庫補助の適用条件とするなどして、遺跡等

の文化財の集中的に分布する地域を対象として周辺の自然環境とともに総合的に保存・活用を図ることを目指すものである。

この構想は、昭和41年度から予算化され、その第一号として、西都原古墳群を中心とする西都原風土記の丘史跡公園は、昭和41年から44年にかけて整備された。

【沿革】

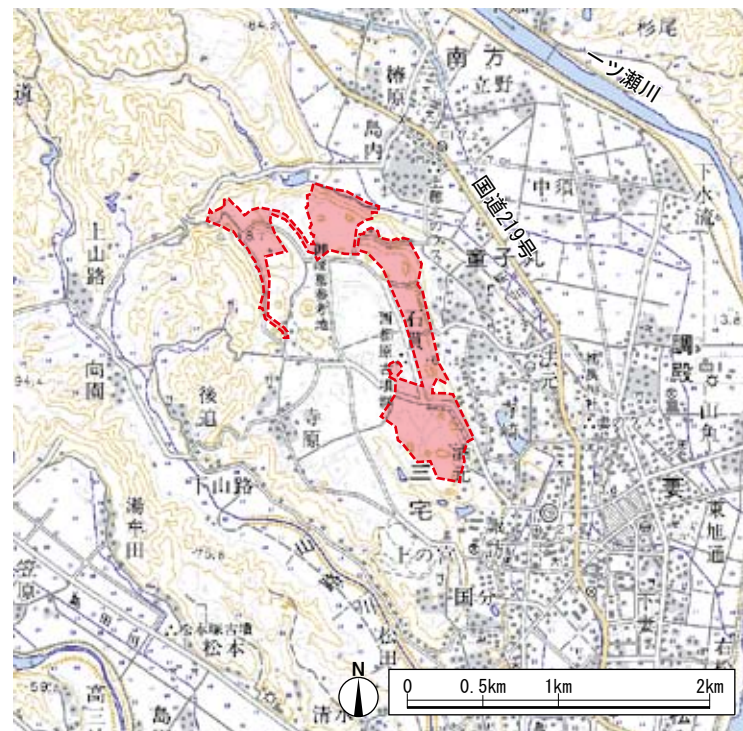
- | | |
|--------------|---|
| 4～7世紀（推定） | 300有余ものさまざまな形をした古墳を築造 |
| 大正元（1912）年 | 本格的な古墳の発掘調査開始 |
| 昭和19（1934）年 | 国の史跡に指定 |
| 昭和27（1952）年 | 国の特別史跡に指定 |
| 昭和41（1966）年～ | 風土記の丘第1号として、古墳と自然が調和した歴史的景観を維持保存する整備を実施 |
| 昭和42（1967）年 | 「西都原風土記の丘」史跡公園が開設 |
| 昭和43（1968）年 | 西都原資料館が開館 |
| 平成17（1995）年～ | 古墳の保存修復、見学施設建設等再整備 |
| 平成11（1999）年～ | 自治省のリーディング・プロジェクト事業により、西都原考古博物館ほか都市公園としての機能拡充 |
| 平成16（2004）年 | 老朽化した西都原資料館に代わり、西都原考古博物館がオープン |

【景観保全のためのしくみ】

- 文化庁
 ：特別史跡（現状変更や保存に影響が出る開発などの制限）
- 宮崎県
 ：県立自然公園（周辺農地等における開発規制）
 ：農業振興地域（農地以外の土地利用を制限）
- 宮城県、西都市、地域住民
 ：西都原協議会（大規模な工作物等を抑制）



鬼の窟古墳



S=1/50,000 位置図

【自然・田園景観との一体性】

古墳の周辺には農地（民有地）が広がり、古くから日常生活の中に古墳群が溶け込むように存在してきたことが見て取れ

る。現在でも農地と古墳の間には何の仕切りもなく、自然、田園と一体となった古墳群として良好な景観を形成している。

樹木も、古墳群の特徴をわかりやすく、また効果的に見ることができるよう位置を選んで配置されている。公園としての整

備も、特に大きな改変を行うことなく、古墳を縫うように園路が配置され、休憩施設も簡素なものを点在させることにより、

古墳群が、その場所に違和感なく、自然に存在しているようなたたずまいとなっている。



第三古墳群上空より



古墳群と隣接する農地



古墳を縫うような園路とさりげなく配置された休憩施設

【景観維持のための配慮】

昭和41年から行われた整備事業では、古墳の復原修理および古墳周囲の環境整備等を行うとともに、歴史的に貴重な資料を保存・公開する施設として、西

都原資料館が建設された。この資料館の建設に際しては、西都原の優れた歴史的景観と自然景観を損ねないように半地下式となっている。

整備地域以外の農地等においても、県立自然公園の指定による開発規制や、さらには農地に係るビニールハウスの設置の規制等、市民の努力と協力により

開放的な景観を維持している。当地域は古墳群だけでなく、その周囲の農地等を含めた一連の開放的な空間の中で、人工構造物の抑制および古墳景観と自然

景観・田園景観の一体化によって、優れた風景が形成されており、それが個性と魅力になっている。



S=1/10,000 特別史跡公園 西都原古墳群管理区域平面図



古墳周辺の花畑 古墳周辺にはナノハナやコスモスが植えられ、季節には多くの観光客が訪れる。



西都原考古博物館からの眺め 第3古墳群が見える。樹林、農地、古墳によって構成された景観となっており、電柱も見られない。公園周辺は農業振興地域に指定されており、また、地域の紳士協定によって大規模工作物も設置されていない。



西都原考古博物館 昭和43年に建設された西都原資料館は自然景観を損なわないように半地下式とされた。この資料館は老朽化により取り壊され、新たな施設として平成16年に建設された西都原考古博物館は、公園内でひとときわ突出した存在となっていることが残念である。

上野公園 / 江戸時代の名所を踏襲して文化施設を集約した近代的な都市公園



【諸元】

所在地：台東区上野公園
 面積：53.4ha
 施設：東京都立恩賜上野動物園、不忍池、国立科学博物館、東京都美術館、上野の森美術館、上野東照宮、台東区下町風俗資料館、水上音楽堂 等々
 事業主体：内務省博物館
 東京府
 管理：東京都建設局
 公園緑地部

【概要】

江戸幕府に信任の厚かった天海僧正の進言により、江戸城の鬼門封じとして建立された東叡山寛永寺の所領であったこの一体は「上野の山」と称され、サクラやハスの名所として知られる江戸庶民でにぎわう景勝の地であった。

この江戸から続く景勝地が公園化されたのは、明治6年「太政官布達」により、寛永寺境内地を公園として指定したことに始まる。幕末の彰義隊の戦争により荒れ野と化した上野の山は、病院・大学用地として準備が進められていたが、新政府の近代化政策の一環として、公園として整備されることとなった。

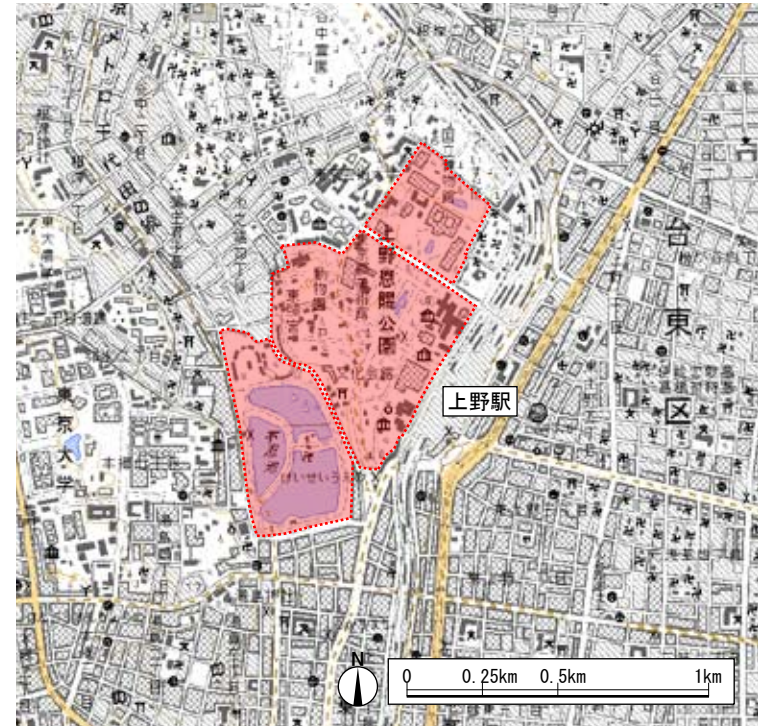
明治期の上野公園は「第1回 内国勸業博覧会」を期に、数多くの博覧会の開催地となり、このため、近代的施設が次々に建設され、これらは博物館や美術館に流用された。また、当地は文部省用地を兼ねていたことから、東京美術学校・音楽学校が相次いで開校し、現代にも続く「文化の森」として発展を遂げている。

【沿革】

- 寛永 2(1625)年 江戸幕府の要人、天海僧正の進言により東叡山寛永寺を建立
- 寛永 13(1636)年 このころから寛永寺でさくらの花見が行われる
- 元禄 12(1699)年 茶屋の設置が許可される
- 慶応 4(1868)年 彰義隊の戦争により、上野・下谷などが焼ける
- 明治 6(1873)年 太政官布達により寛永寺境内を公園に指定
- 明治 9(1876)年 公園建設完成・開園
茶屋が撤去され、精養軒などが開業
- 明治 10(1877)年 第1回内国勸業博覧会を開催
- 明治 15(1882)年 動物園と国立博物館を設置
- 明治 22(1889)年 東京美術学校開校
- 明治 22(1890)年 東京音楽学校開校
- 大正 13(1924)年 東京市に払い下げられ、上野恩賜公園という名称となる
- 昭和 28(1953)年 水上音楽堂竣工、竹の台（大噴水）周辺整備
- 昭和 55(1980)年 下町風俗資料館が開館
- 平成 2(1990)年 不忍池浄化対策、周辺植栽整備



名所江戸百景 上野清水堂不忍池
 (歌川広重画)



S=1/25,000 位置図

【上野公園周辺の地形】

上野公園とその周辺を含むいわゆる「上野の山」は、地形学上では山の手台と呼ばれる台地と東京低地の境にあたり、「上野台」と呼ばれる台地となっている。

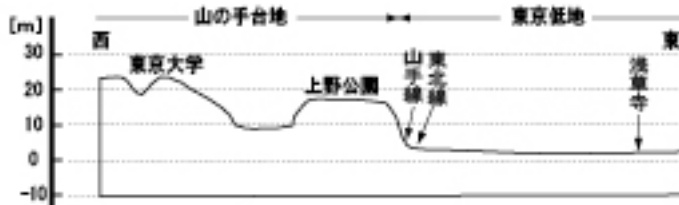
この場所にはいくつもの時代に渡る遺跡が存在し、そしてそれは、上野台の地質学的な成立過程と深い関わりを持っている。

縄文時代の不忍池は海であり、狩猟採集生活にうってつけなこの入江に人々が集落を構えていた。地形の隆起により海退が進み、海底だった低地が地表に姿を現したことにより、地盤が堅く眺望の利くこの高台は、時の権力者の占有地として受け継がれていった。

このような過程を経て形成された上野台を取り巻く台地・崖線・水辺という空間構造と景観こそが、後に当地が「名所」として歴史を刻んでいくことを決定づける要因となったのである。



上野公園付近の概略地形



上野公園付近の断面図



江戸不忍弁天ヨリ東叡山ヲ見ル図 近世に描かれた絵図にもみられるように、台地と崖地、水辺で空間が構成されている。



現在のの上野公園 手前のハスに覆われた不忍池から台地・崖地方向を望む。

【名所としての上野の山】

いわゆる上野のお山と不忍池周辺が、現在まで引き継がれる「名所」として成立したのは、江戸時代のことである。江戸城の鬼門封じとして、東叡山寛永寺が創建されたことより、多くの参詣客が訪れ、当地はにぎわいを見せ始める。

上野の山にサクラが植えられたのは、寛永寺の建立を進言した天海僧正や、当時の幕府の文政面での実力者である林羅山が好んでサクラを植えたことに始まるといわれている。寛永期末には、全山がサクラで覆われるほどとなり、元禄頃になると、桜ヶ岡（現在の西郷像、清水堂のある台地）が花見の場として、一般庶民に公開されることとなった。

不忍池は、寛永寺創建に際し、比叡山麓の琵琶湖に見立てて、琵琶湖の竹生島を模して島を築き弁天堂作ったことにより、その名を馳せることとなった。その水辺の景観は、初夏のハス、夏の納涼、秋の月見など、季節により変化に富んでおり、浮世絵にも多く取り上げられた。

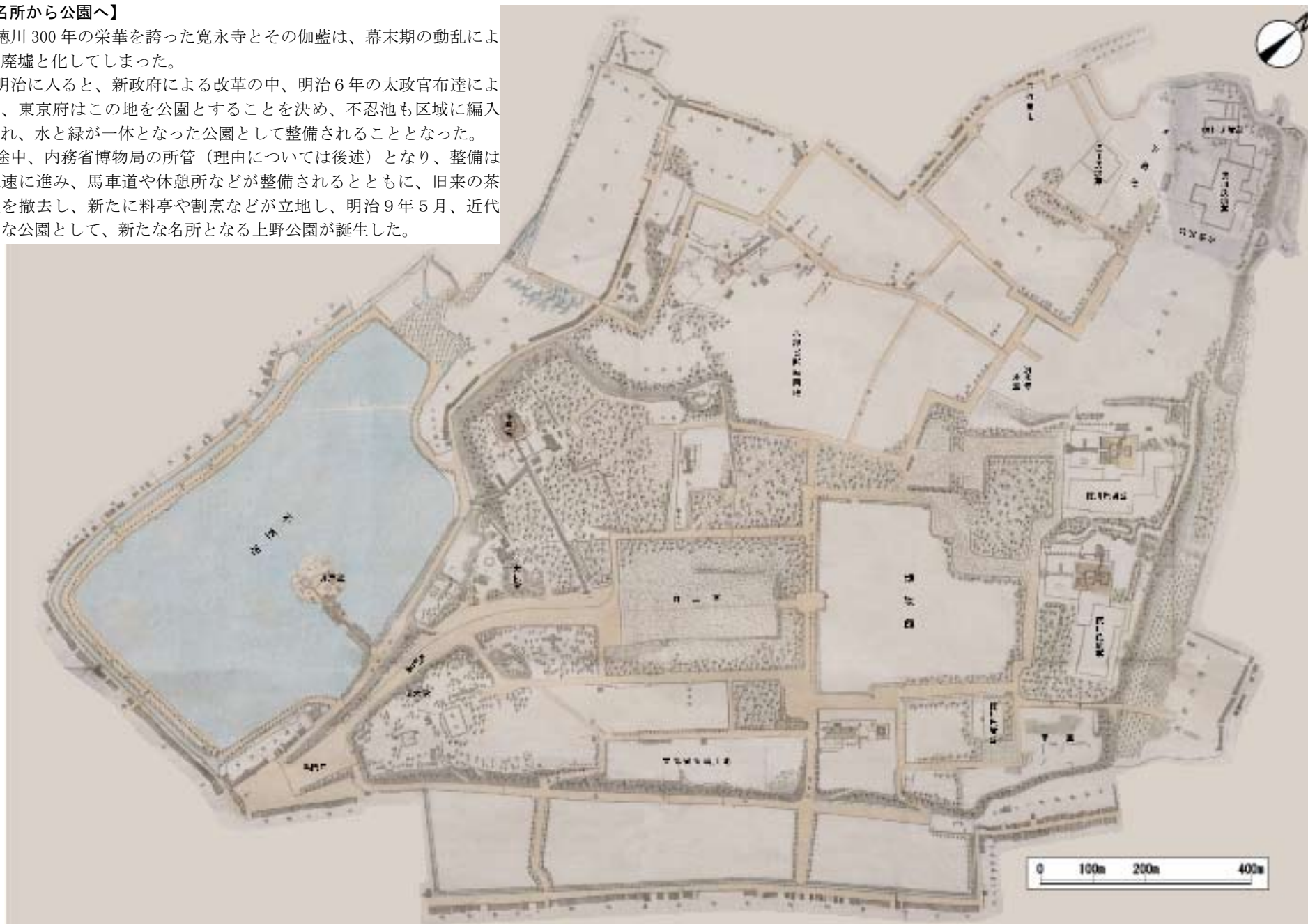
また、不忍池畔には茶屋等が立ち並び、庶民の社交の場として賑わいを見せていた。継承後としての上野のお山や不忍池と、遊興施設である茶屋等が一体となって、江戸随一の名所としての地位を確立していった。

【名所から公園へ】

徳川 300 年の栄華を誇った寛永寺とその伽藍は、幕末期の動乱により廢墟と化してしまった。

明治に入ると、新政府による改革の中、明治 6 年の太政官布達により、東京府はこの地を公園とすることを決め、不忍池も区域に編入され、水と緑が一体となった公園として整備されることとなった。

途中、内務省博物局の所管（理由については後述）となり、整備は急速に進み、馬車道や休憩所などが整備されるとともに、旧来の茶屋を撤去し、新たに料亭や割烹などが立地し、明治 9 年 5 月、近代的な公園として、新たな名所となる上野公園が誕生した。



S=1/10,000 明治初期の上野公園

【近代化と上野公園】

上野公園が内務省博物局の管轄となったのは、国策として、ここに博物館を建設し、博覧会を開催するという政治的な意図によるものであった。積極的な近代化政策を進めるにあたり、国内の産業振興・学問発展を促す施策として、博覧会開催と博物館建設を急務と考え、文部省から用地の返還を受け、寛永寺

本坊跡を博物館用地とした。

上野公園の空間構造は、寛永寺のものによく似ている。双方とも、台地と崖線と水辺という地形的な特徴をそのまま活かしていることは前述の通りであるが、寛永寺が江戸幕府による国家的色彩を持っていたのと同じく、上野公園も博物館を中心とした、明治新政府の国家的な性格を持った公園であったことが

多分に影響しているためであると考えられる。

上野公園は、国家プロジェクトの中心を担う公園として、明治10年「第1回内国博覧会」の開催を皮切りに、その後、様々な国家的行事の開催場所として、また、近代化の拠点として発展を遂げていったのである。

【文化の森、現代の名所】

明治14年に博物館が竣工したことに始まり、上野公園は文化・教育の発信地とされてきた。

明治期から昭和初期にかけて、博物館の付属施設としての動物園の開園、東京音楽学校および東京美術学校（現東京芸大）の開校、帝国図書館（現国会図書館上野支部）、東京府美術館（現東京都美術館）、東京科学博物館

などが相次いで建設された。

戦後の荒廃した公園の復興に伴い、国立西洋美術館や東京文化会館、水上音楽堂、また近年では、下町風俗資料館などが建設され、現在も我が国を代表する文化ゾーンとなっており、旧来から続く名所としての特性と相まって、一般的な公園としてはくくりきれない、豊かな空間を形成している。



江戸時代の寛永寺の伽藍配置



上野公園の変遷

砧公園 / グリーンベルト構想を起源に持つ自然地形を活かした緑地



【諸元】

所在地：東京都世田谷区
 面積：39.1ha
 施設：ファミリーパーク（芝生広場）、野球場兼競技場、小サッカー場、サイクリングコース、世田谷美術館、有料駐車場、バードサンクチュアリ 等
 管理：東京都

【概要】

砧公園は、紀元2600年記念事業の一環として、首都東京の周辺に計画された6箇所の大緑地の内の1つであり、戦前の「東京緑地計画」における環状緑地帯計画の一角を担うことを目的に計画された公園である。

これらの大緑地は計画当初、有事を想定した、防空緑地としての役割を担うものであり、砧公園についても、戦時中は、食料増産のための農地として利用されたり、防空壕などが彫られるなどした。

戦後は、農地解放により、そ

の多くの土地が供出され、また、都営のゴルフ場となるなどの変遷を経て、現在は自然地形を活かした芝生広場と樹林で構成されたファミリーパークとして整備され、近隣住民の憩いの場となっている。

【沿革】

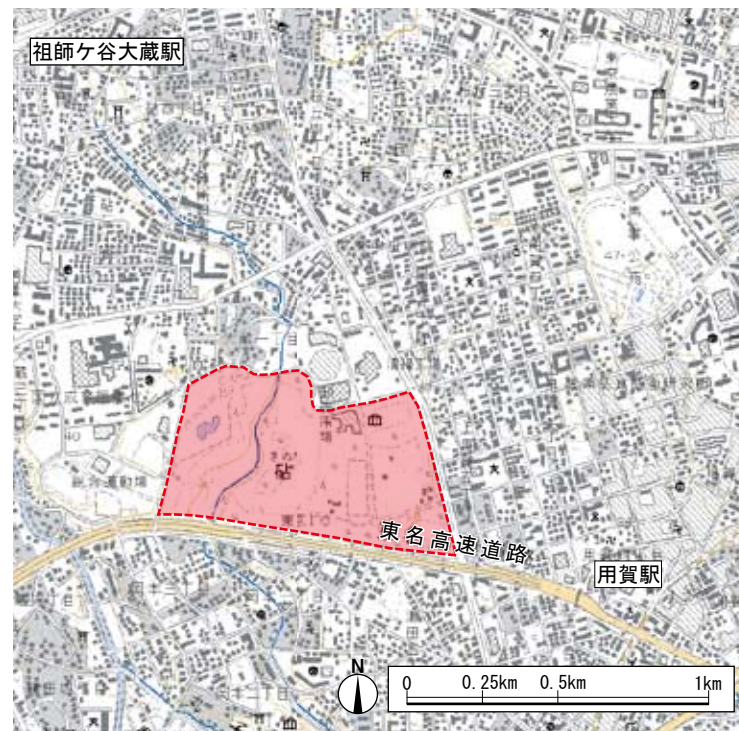
- 昭和 15(1940)年 紀元2600年記念事業としての砧緑地の設置が東京府記念事業審議会で可決
- 昭和 16(1941)年 用地買収終了、「勤労報国隊」により整地作業を開始
- 昭和 18(1943)年 軍事・滑空・戦技訓練場の建設開始、一部区域（約6割）を農用地として利用
- 昭和 21(1946)年 戦災復興用として苗圃での樹木育成の開始
- 昭和 22(1947)年 失業対策事業として整地、草刈り等の開始
- 昭和 23(1948)年 昭和21年に公布された「自作農創設特別措置法」により公園面積の40%以上を農地解放
- 昭和 24(1949)年 野球場・野営場が新設
- 昭和 30(1955)年 東京都砧ゴルフ場開設
- 昭和 32(1957)年 砧公園開園
- 昭和 41(1966)年 ゴルフ場を廃止し、既設公園に追加開園
- 昭和 61(1986)年 世田谷美術館開館
- 平成 6(1994)年 再生整備
- ～10(1998)年 再生整備



自然地形を活かした緩やかな勾配の芝生広場



公園を縦断する谷戸川とそれを渡る吊橋



S=1/25,000 位置図

【東京緑地計画】

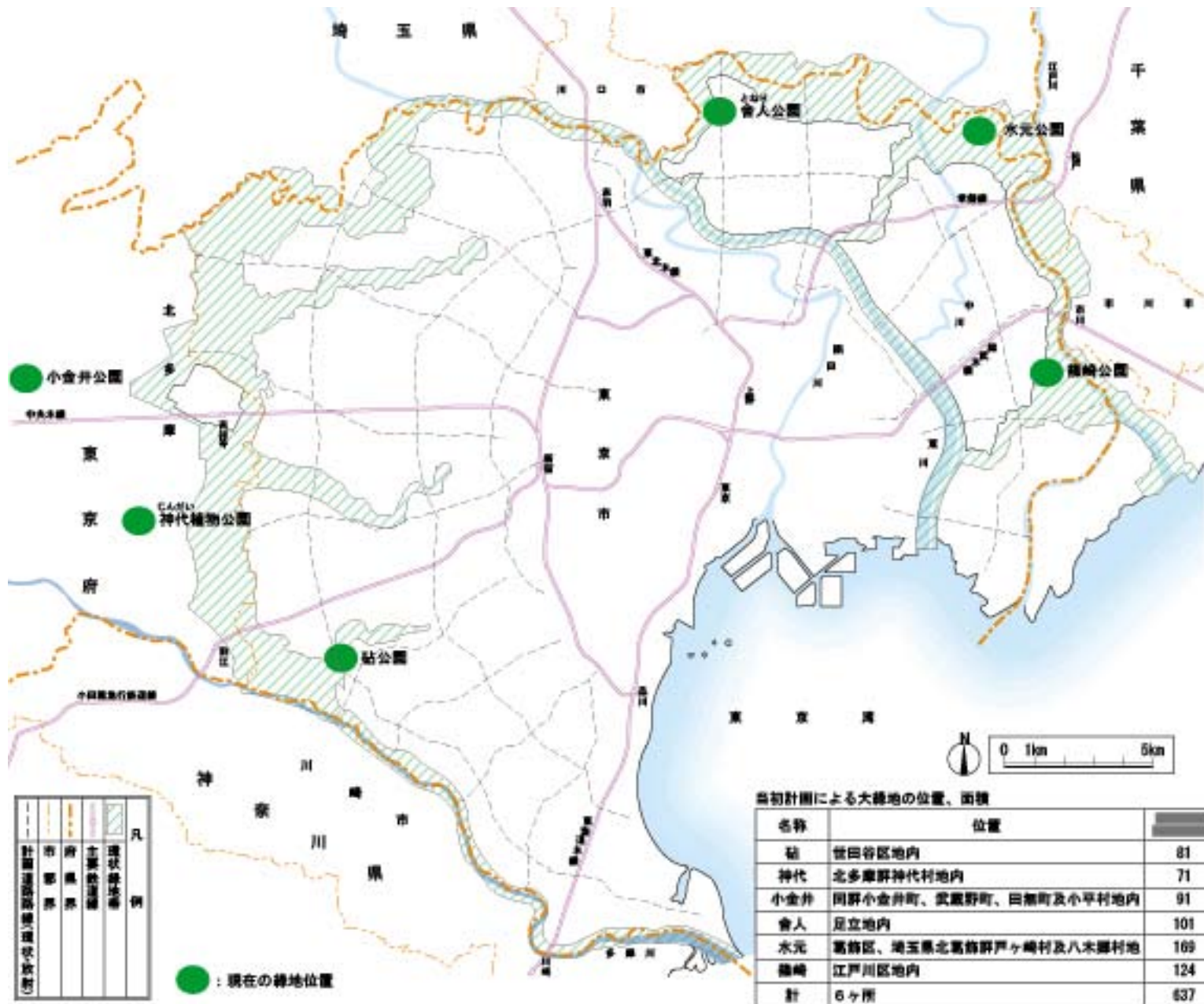
東京市では、昭和初期から人口の増加・都市の巨大化が起りはじめたことより、都市環境が悪化し、総合的な緑地計画が必要となってきた。これを受け、昭和7年、東京緑地計画協議会が発足し、公園その他の緑地計画の体系化を図ることとなった。この中で、都市の無制限な拡大を防ぐため、東京市の外周に沿って環状の緑地帯を設置する計画が定められた。

【大緑地の配置】

昭和15年、神武天皇即位2600年の記念事業として、当時の東京府は6ヶ所の大緑地の設置を決めた。その1つが後に砧公園となる砧緑地である。

大緑地は、以下の基本方針により計画された。①東京駅を中心とした半径20km圏内の環状緑地帯内に配置。②都市計画道路路線（環状・放射）、鉄道、軌道敷を等接または近接。③緑地相互の間隔は4～8km。④面積は各20万坪以上とし、地形地物の現状に応じ出来るだけ大きく。⑤各緑地内に、最小5万坪の平坦部を包含させ、付近に所在する大水面や水流に直接。

また、有事の際に防空的役割を発揮する防空的緑地の必要性も高まっていた。こうして、環状緑地帯計画の一環および防空的役割として6ヶ所の大緑地が計画された。



【地形を活かした広大な広場】

砵緑地は当初81haを有し、昭和17年度には全地域の整地を終了したが、戦中の食糧確保のために農地として利用されていた区域もあり、戦後、農地解放によって緑地面積の40%以上を減ずることとなった。

その後、昭和30年代の砵ゴルフ場として利用された時代を経て、そのゴルフ場のコースの芝生や起伏の変化を活かし、開放的な芝生広場を中心とするファミリーパークとして、砵公園が誕生した。

昭和41年の開園当時、自由に利用できる広大な芝生広場の存在は、他に類を見ない貴重なもので、その心地よさから、近隣住民の憩いの場として人気を博し、現在も砵公園のシンボリックな役割を果たしている。

大緑地の計画当初からの基本的な考え方である、「①固有の景観を永久に維持する」、「②現在の地形をなるべく改変しない」、「③現存の樹木を保存するため立竹木もそのまま買収する」、といった点にのっとり、昭和15年の計画当初より現在に至るまで、基本的な緑地の地形や緑地を縦断する谷戸川の線形は変わっておらず、既存の樹木も大木となり緑陰を提供しており、谷戸川に向かい緩やかな勾配を描く芝生広場が自然地形を活かしながら快適な空間をつくり出している。



S=1/6,000 砵公園平面図

昭和の初めに計画された、東京の外周を取り巻く環状緑地計画は、最終的には、その全体的な完成は実現し得なかったものの、現在、周囲を高密度な市街地に囲まれた砵公園においては、都市の中に残存する貴重な緑空間として、大緑地を配置した当初の思想が、極めて大きな成果をもたらす結果となっている。



砵公園のシンボルである広大な芝生広場

みずもと

【水元公園】

環状緑地計画における6ヶ所の大緑地の1つである水元公園は、河川の名残である小合溜という大水面を中心に整備された公園である。小合溜から引いた大小の水路を園内に巡らせることによって、他の大緑地とは趣を異にする水郷景観をつくり出している。

また、貴重な水辺の植物はもとより、高さ20mにも達する約200本のポプラ並木や約2,000

本のメタセコイヤなど、都立公園としては最大の「森」を形成している。

砦公園と同様、水元公園についても、皇紀2600年記念事業として計画された当初規模の約169haに対し、40%以上が農地開放により面積縮小となったが、従来から風致地区の指定を受けるなど景勝地であったこの土地の特徴を活かした公園づくりが現在も行われている。

【諸元】

所在地：東京都葛飾区水元公園

面積：81.7ha

開園：昭和40年4月1日

施設：水生植物園、バードサンクチュアリ、屋外ステージ、少年キャンプ場、せせらぎ広場、冒険広場、有料駐車場 等

管理：東京都



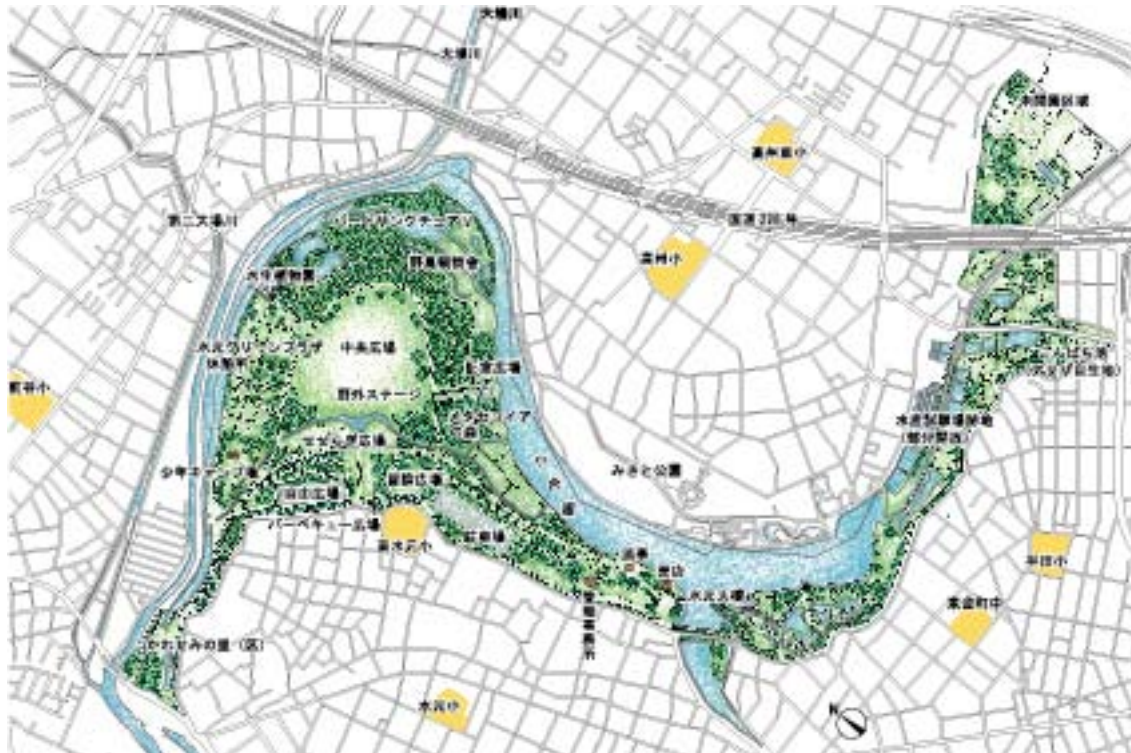
秋の水元公園



水際のポプラ並木



対岸のみさと公園 水元公園の東側の対岸には「みさと公園」があり、小合溜の水面と、これら公園の緑が一体となり、良好な水郷の風景を作り出している。



S=1/20,000 水元公園平面図

アルテピアッツァ美唄 びばい / 廃校を活用して創造された芸術空間



【諸元】

所在地：北海道美唄市落合町
 面積：約7ha
 施設：アートのスペース、市民ギャラリー、野外芸術空間、カフェアルテ等
 事業主体：美唄市
 設計者：安田 侃（設計監修）
 管理：NPOアルテピアッツァびばい

【概要】

美唄市はかつて、三井美唄炭鉱と三菱美唄炭鉱を擁する石炭の街として栄え、最盛期には人口9万人、本施設の元となる栄

小学校の生徒数も1,200人を数えたが、炭鉱閉山の影響等から人口は激減、在校生も最終的には10数名にまで減り、昭和56年に同市立東栄小学校への統合により廃校に至った。

廃校後、学校敷地には2階建ての木造校舎と屋内体育館が残され、校舎1階部分は市立栄幼稚園の園舎として、屋内体育館も地域住民に解放されたが、余り活用されていなかった。

こうした中、美唄出身でイタリア在住の現代彫刻家安田侃氏は、炭鉱で賑わっていた頃を彷彿とさせる校舎と自然に囲まれ

た環境を気に入り、市に対し、既存施設の活用により、美唄の史実と、そこに存在した人々の精神性を象徴的に示す場所とすることを提案した。同氏は、施設の全面的な監修に協力を約束し、同氏の彫刻作品をも展示するアルテピアッツァ美唄および周辺整備が実現したのである。

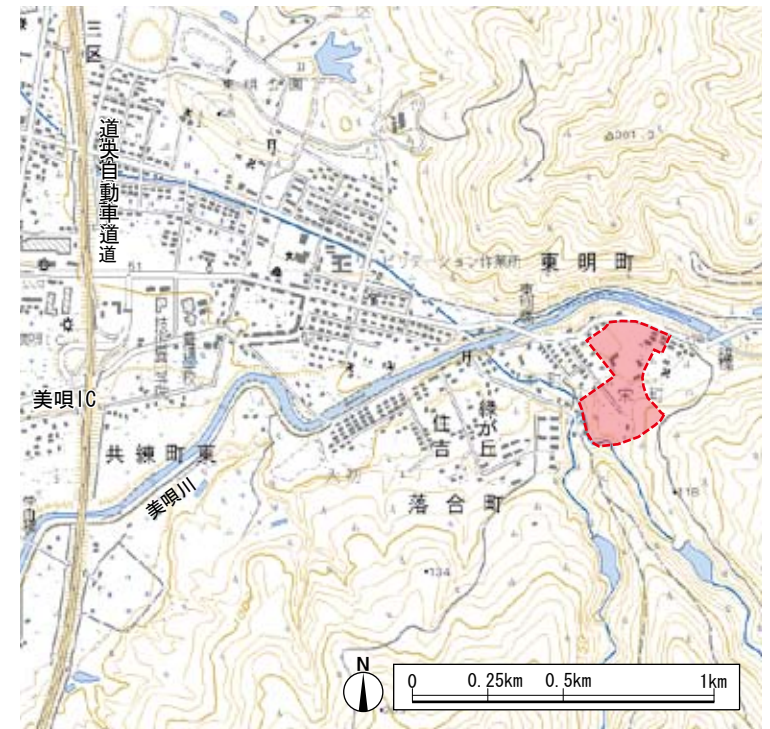
時代の盛衰を見守ってきた木造校舎や体育館が、自然や地域の歴史と彫刻作品の融合した芸術空間として再生され、今では美唄市を代表する芸術・文化施設として、市民や道内外での評価も高まっている。

【沿革】

- 昭和 38(1963)年 三井美唄炭鉱閉山
- 昭和 47(1972)年 三菱美唄炭鉱閉山
- 昭和 56(1981)年 市立東栄小学校との統合により栄小学校廃校
- 平成 3(1991)年 旧栄小学校の体育館を交流スペース・ギャラリーに改修
- 平成 4(1992)年 野外スペースを整備、アルテピアッツァ美唄オープン（7月）、初の演奏会を開催（11月）
- 平成 10(1998)年 旧栄小学校舎の改修工事、市民有志を中心とした「アルテピアッツァ友の会」発足
- 平成 11(1999)年 旧栄小学校2階に市民ギャラリー開設



現在のアルテピアッツァ美唄（左写真）と昭和30年頃の美唄市立栄小学校と炭坑住宅街の様子（右写真）



S=1/25,000 位置図

【安田氏による監修】

安田氏の監修により、現地モデルを活用し、周辺との調和等に配慮した園地の造成および施設配置等が実施されている。

現在も、安田氏は定期的に現地を訪れ、園地の拡張や部分的な改修などについて監修を行い、整備を進めている。



建設当時の様子 現地でモデルを配置するなどして、安田氏監修のもと、造成・施設配置等を実施している。

【水の広場】

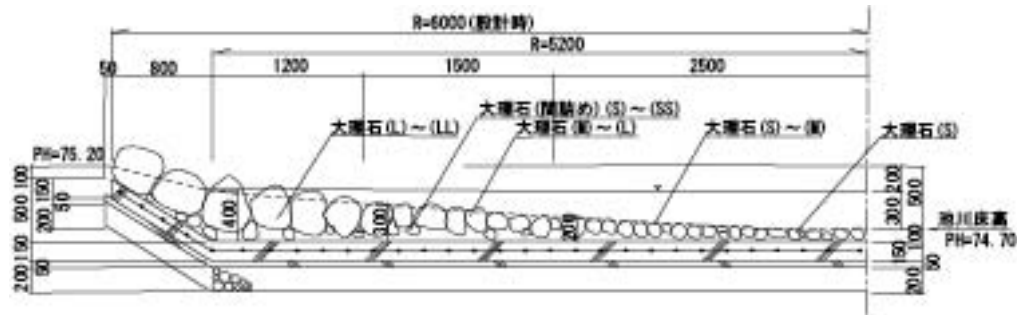
現場における水路や池の規模、石舞台のモデル検討により、当初設計より、池の直径を2mほど拡張している（平面図参照）。

水路も当初計画では、池と開渠で結ぶこととしていたが、彫刻との配置バランスを考慮し、あえて暗渠により池とつなげている。

水路の底面はイタリアから取り寄せた白色の大理石を使用し、モルタル目地が見えないように、小さな大理石で間詰めが施されている（下断面図参照）。



S=1/1,000 水の広場平面図



S=1/60 池断面図 現場での検討により、当初設計より池の直径を2m(R=7000)ほどに拡張している。



水の広場



木造校舎や周辺の山並とのバランスを考慮し、池の規模を設定

てんしょう
【天翔の丘】

当地では、他地区で発生した残土を随時搬入・ストックしており、これを活用して園内の造成等を行っている。「天翔の丘」と名付けられた築山も、この残土を活用して造成された。

安田氏の監修により、背後の樹林や周辺の風景との兼ね合いから、大幅な造成計画の変更がなされており、特に、頂上部への彫刻設置については、当初、頂上にただ彫刻を載せるだけであったが、頂上部分を掘り下げ、そこに彫刻を隠す（丘の麓から

は見えない）ように設置し、頂きの上で初めて目することができるような配慮がなされている。頂上への階段の線形も、より変化をつけるために見直しを行っている。



建設現場での安田氏



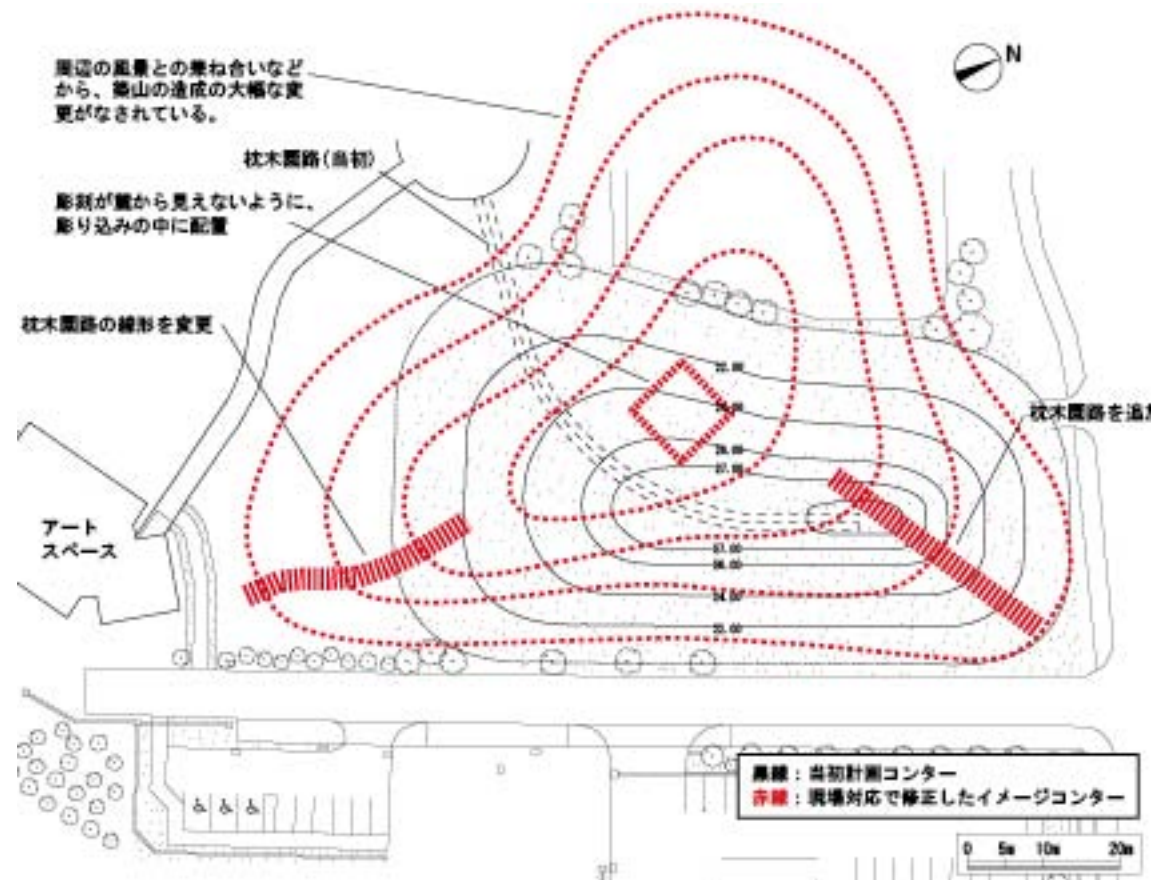
鉄道の枕木の再利用した頂上へ向かう階段



頂上部からの眺望



天翔の丘 頂上部



S=1/1,000 天翔の丘 平面図

【ギャラリー・栄幼稚園】

木造校舎教室棟は、外観や内装は当時の面影を残しつつ、設備などは改修がなされ、2階部分は「市民ギャラリー」として解放され、校庭にある屋外作品を眺めることが出来る展望展示室を2室、ほかに市民展示室2室が設けられている。1階部分は引き続き、市立栄幼稚園として使用されている。

幼稚園を含む館内の各所には、安田氏の作品で小規模なものが14点常設展示されている。



ギャラリー



現在、2階はギャラリー、1階は栄幼稚園として活用されている旧栄小学校の校舎

【アートスペース】

体育館を部分的に改修し、鉄骨の見える天井アーチ、木製の床など当時の姿を再現しつつ「アートスペース」として活用している。

展示空間としてだけでなく、ピアノリサイタルやジャズコンサート、チェロ演奏会などの会場として、また、各種サークル活動などの場として、幅広い利用がなされている。



旧態を活かしつつ改修が施され、アートスペースとして活用されている体育館

こが 古河総合公園

原風景の再生と新たな名所づくりを目指した市民の交流空間



【諸元】

所在地：茨城県古河市鴻巣
 面積：22.4ha(計画 25.2ha)
 施設：御所沼、民家園、管理棟、花菖蒲田、ジェラテリア、桃林 等々
 事業主体：古河市
 設計者：東京工業大学景観研究室(基本設計)、中村良夫(東京工業大学名誉教授、コーディネーター)
 管理：古河市公園緑地課、菅博嗣(パークマスター)、岩堀康幸(パークマスター)

【概要】

茨城県古河市は関東平野のほぼ中央、利根川と渡良瀬川が合流する地点にある。かつては、その渡良瀬川と広大な草原を介して連なっていた沼が複雑な曲線を描いて食い込んでいた台地上、約25haの敷地に展開しているのが古河総合公園である。

1975年に開園した北側の約5haのエリアは、江戸時代にすでに名高かったという桃の木が約2,000本と、新たに花菖蒲、大賀蓮(古代ハス)が植えられた沼沢からなる、典型的な花卉鑑賞用の庭である。3月末の桃花の咲く時期には数10万人が訪れるという。

隣接する20haの敷地を一体的な公園として整備することになり、そのコーディネーターを、幼少時をこの地で過ごした中村良夫氏(東京工業大学名誉教授)が務めることとなった。

2003年には、消滅沼の復元による自然と文化の再生、自然と人間との多様な接触を表現したデザイン、四季折々の自然に親しむ市民の営み等の点が高く評価され、ユネスコが主催する「メリナ・メルクーリ国際賞」を、アジアで初めて受賞した。

【沿革】

- 昭和 47(1972)年 大総合公園主要構想案の策定
- 昭和 50(1975)年 一部開園 (5.0ha)
- 平成元 (1989)年 基本計画の見直し委員会を開催
- 平成 4(1992)年 御所沼の復元(平成8年まで)
- 平成 9(1997)年 公園周辺整備計画(計画面積25.2haに拡大)
- 平成 11(1999)年 パークマスター着任
- 平成 15(2003)年 メリナ・メルクーリ国際賞を受賞

【御所沼の来歴】

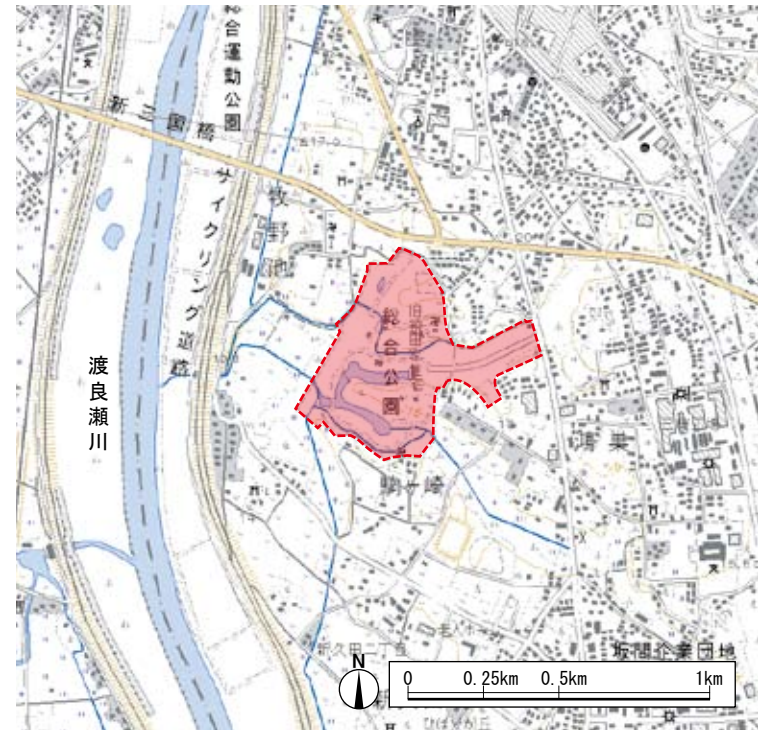
渡良瀬川沿いの舌状台地に囲まれたヒトデのような形をした沼が御所沼である(左図参照)。御所沼の名は、室町期に関東管領を司っていた足利一統が古河公方と称して移住し、その出城である「鴻ノ巣御所」を囲む沼であったため、その名が付いたといわれる。

戦前の干拓の波には取り残されていた御所沼だが、戦後の食糧難に期に始まった土地改良事業により水田へ姿を変えた。しかし、昭和47年には減反政策が開始され、水田が放棄されることとなった。

都市計画決定により公園区域となった後、昭和50年に、江戸時代に既に名高かった桃園と、ハス等が植えられた沼沢からなる約5haを開園した。しかし、御所沼の跡地は、市街地から流れ込む二筋の汚れた小川の処理が課題となり、手つかずのままとなっていた。



明治時代の古河の地図



S=1/25,000 位置図

【御所沼再生の過程】

古河総合公園の整備におけるポイントは2点である。1点目は「御所沼の復元」、もう1点は、そのよみがえった御所沼を中心とした「公園づくり」である。

御所沼の復元は、平成元年の「公園基本計画見直し委員会」から始まる（座長 中村良夫氏）。

「御所沼は自然と人間の愛憎が、連れあいながら互いに育んできた記憶の集積である。そういう生成する矛盾そのものを、デザインの基底に据えるのがふさわしいのではないだろうか」との考えのもと、単に古めかしく懐かしい農村風景を再現するのではなく、水害と共に生き、国策としての水田の拡張とその荒廃に翻弄された、関東平野のすさまじい大地の輪廻転生を凝縮し造形することを目指し、谷戸地形と沼の復元が行われることとなった。

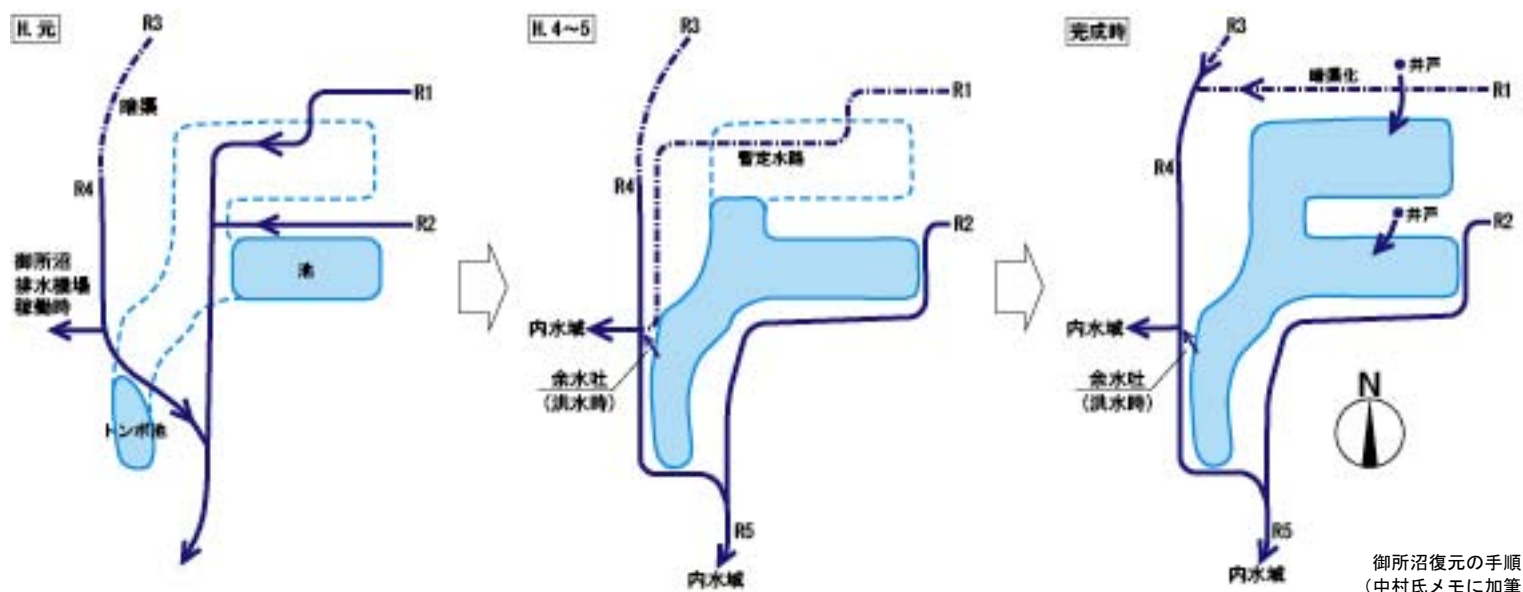
まずは南西隅のトンボ池の試掘や基礎調査が行われたが、懸案となっていた南北2筋の汚れた小川の処置が定まらず、難航した。平成4年、北側の流れは暗渠、南側の流れはそのまま小川の景色を崩さず公園の隅に迂回させることに決定し、南側の小川については、公園へ流れ込むところに沈殿池を設け、湿生植物のからんだごろた石の間を薄層流でゆっくり流して浄化することとなった。

平成8年、沼を越えて鴻ノ巣

御所跡地につながる園路の橋が竣工。それと共に、南北の沼を区切っていた最後の盛土を突き崩し、撤去され、ここに御所沼がよみがえったのである。



復元前・後の御所沼周辺の様子



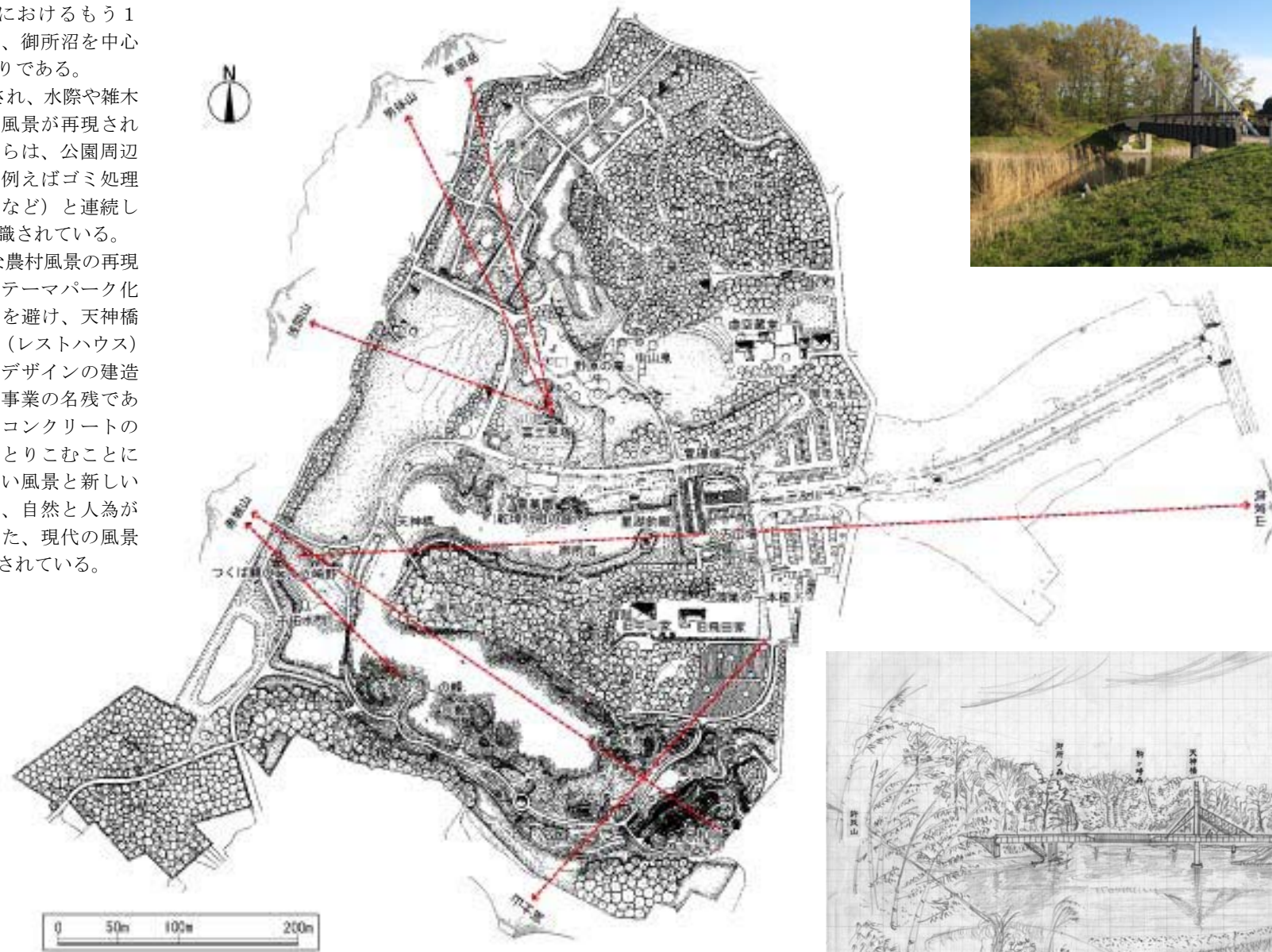
御所沼復元の手順
(中村氏メモに加筆)

【公園デザインのポイント】

本公園の整備におけるもう1つのポイントは、御所沼を中心とした公園づくりである。

御所沼が再生され、水際や雑木林に、懐かしい風景が再現されているが、それらは、公園周辺の現代の景観（例えばゴミ処理場の巨大な煙突など）と連続した風景として意識されている。

つまり、純粋な農村風景の再現によって風景をテーマパーク化してしまうことを避け、天神橋やジェラテリア（レストハウス）などのモダンなデザインの建造物や、土地改良事業の名残である鉄製の水門やコンクリートの水路等をあえてとりこむことにより、古めかしい風景と新しい光景が混在する、自然と人為がない交ぜとなった、現代の風景そのものが表現されている。



S=1/5,000 古河総合公園 平面図



天神橋



中村氏の手による風景のためのデッサン

【開かれた公園】

台地の縁をしめる古河総合公園は、見晴らしの良い場所である。富士塚を始め、多くの視点場が園内に設けられ、さらに視線が遠くへ届くように様々な工夫が施されている（左平面図参照）。

一方、公園の沼や森がそのまま外周の畑につながる、領域を定義されながら開かれた公園となっている。空間をその役割で純化し、細切れにするのではなく、むしろ半ば開かれ、曖昧に仕切られた森、原っぱ、耕地、田、沼という景観の綴り合わせを大事にしている。



つくば観の丘から筑波山を望む

【近世名所の基本原理の踏襲】

この公園は、近世都市名所をモデルとし、名所の基本原理をふまえ、根本となる自然地形や長い歴史の中で使い込まれてきた「地相」、その上にかかる古河公方の旧跡などの「歴史」、そしてレストランなどの「社交」の場、これらの要素の重層化することにより、公園の味わいを深めている。



ジェラテリア（レストハウス）

【場所の意味づけによるデザイン】

前述の平面図に示すように、この公園には多くの地名がつけられている。現地取材（御所沼に関する聞き取り調査）を行い、昔のこの地の小字名を収集、それを復活させたもので、言うなれば、場所の意味づけによるデザインである。

空間的なランドスケープに地名が重複することにより、空間の味わいを深くし、言葉は背景を与えられる。その呼び水として「あらくだみち新久田道」「せいこちようでん星湖釣殿」「みたらいけ御手洗池」など、一部を石に篆刻で刻み、各所に設置している。



星湖釣殿



御手洗池



新久田道

【特徴的な管理運営手法】

本公園は、特徴的な管理運営手法を導入している。パークマスター制度と古河総合公園づくり円卓会議である。

パークマスターとは、日常的な公園管理は元より、市民の活発な公園利用を促すと共に、市民の発案による企画を引き出し、これを支援する公園づくりの専門家である。円卓会議とは、このパークマスターが築いてきた人脈を元に、市民と行政の共同会議として、本公園の価値と可能性を確かめあひながら、公園の運営に関わるアイデアを収束させ、公園の活用について検討する組織である。

これらの取り組みにより、市民参加による様々なイベントや活動が展開されている。



田植えや茶摘みなど、園内の資源を活かした様々な活動を展開

モエレ沼公園 / 広大な敷地を活かして大胆に造形した大地のアート



【諸元】

所在地：北海道札幌市東区
 面積：約 188.8ha
 施設：モエレ山、プレイマウンテン、モエレビーチ、遊具エリア、野球場、陸上競技場、野外ステージ、ミュージックシェル等
 事業主体：札幌市
 設計者：イサム・ノグチ（基本設計）、ジョージ・サダオ（監修）、アーキテクトファイブ（設計総括）
 管理：札幌市みどりの管理課

【概要】

モエレ沼の名はアイヌ語の「モイレ・ペツ」に由来するもので、「流れの遅い、ゆったりとした川」という意味である。旧豊平川^{とよひら}の馬蹄形の河跡湖であり、札幌市では数少ない水郷景観を有し、古くから公園化が求められていた場所である。

札幌市は、このモエレ沼に囲まれた広大な土地を公園化するにあたり、20世紀芸術の巨匠イサム・ノグチに基本設計を委ねた。ノグチは、長年温めてきたランドスケープのアイデアを込めた「公園全体を一つの彫刻」とみなし、各施設を円や三角、四角など原初的、根源的ともいえる象徴的な形にデザインし、壮大なスケールをもってこれを公園全体に配置し、世界にも類例のない公園の計画を立てた。

モエレ山やプレイマウンテンなどの大規模な地形造成や、ガラスのピラミッドを中心としたビスタや軸線の強調、遠方に広がる山並みを取り込むことにより、ダイナミックに変化する景観を楽しむことのできる空間となっている。

【沿革】

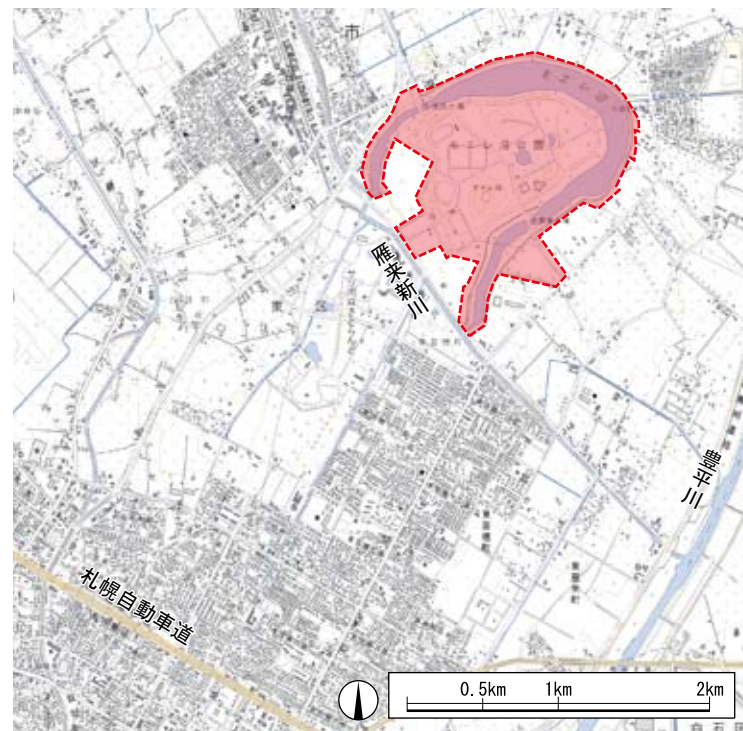
- 昭和 48(1973)年 「札幌市緑化施策大綱」策定。都市環境公園（水郷公園）として位置づけ
- 昭和 52(1977)年 公園事業に先立ち、姉妹都市ミュンヘン市の公園に習い、ごみ処理場として活用後、不燃物ごみを基盤とした公園を目指し、用地買収を開始
- 昭和 53(1978)年 処理場施設の建設開始
- 昭和 54(1979)年 ごみの搬入開始、平行して公園事業に着手、基本計画を策定
- 昭和 57(1982)年 「札幌市緑の基本計画」においてモエレ沼公園を東北部の拠点公園として位置づけ、事業認可を受け基盤造成やサクラの植栽などを開始
- 昭和 63(1988)年 札幌市内の企業家の働きかけによりイサム・ノグチに基本設計を依頼
- 平成元(1989)年 イサム・ノグチ財団の専務理事ジョージ・サダオが監修、アーキテクト・ファイブが設計総括を行うことで、モエレ沼公園の造成を開始
- 平成 06(1994)年 完成部分を供用開始
- 平成 14(2002)年 グッドデザイン大賞 受賞
- 平成 16(2004)年 全面オープン
- 平成 19(2007)年 土木学会デザイン賞 受賞



ゴミ処理場当時のモエレ沼



イサムノグチの現地視察の様子



S=1/50,000 位置図

【イサム・ノグチの参加】

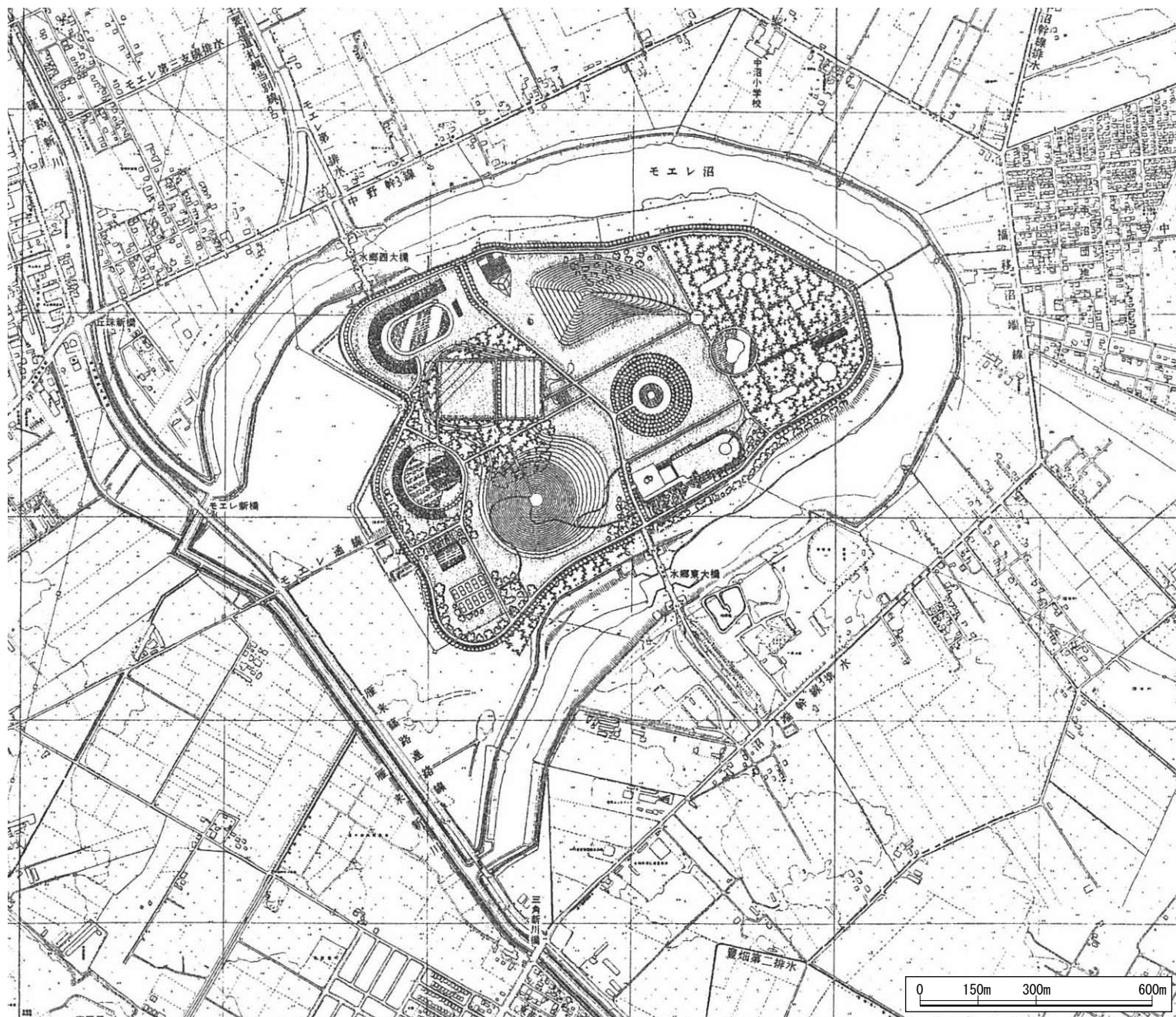
札幌市内の企業家が、日系米国人彫刻家イサム・ノグチに出会い、彼の未完のランドスケープのアイデアを知り、札幌市の事業に参加させるべく働きかけを行った。昭和63年3月、札幌市は、造成が始まっていたモエレ沼公園をその候補地の1つとして紹介し、その地に強い関心を示したノグチに対し、基本設計を依頼した。

ノグチは、3度札幌市を訪れ、精力的に作業を行い、同年9月には基本設計を完成させ、11月17日のノグチの誕生日には1/2,000の公園模型を披露した。

その年末にノグチが急逝し、事業の実施は危ぶまれたが、イサム・ノグチ財団の専務理事で建築家であるジョージ・サダオが監修を、基本設計に参加した建築設計事務所アーキテクト・ファイブが設計総括を行うことで、イサム・ノグチの遺作となるモエレ沼公園の造成が平成元年から開始された。この事業は、当地の公園化構想から約30年の年月を掛けて実現している。



2,000分の1の公園模型



S=1/15,000 全体計画平面図

【プレイマウンテン】

1933年、イサム・ノグチは「地球を彫刻する」という発想により「遊び山」を構想し、ニューヨーク市に提案したが実現せず、長年にわたりこのアイデアをあたため続けていた。モエレ沼公園のプレイマウンテンは、この「遊び山」を実現したものであり、ノグチの「彫刻を地球そのものに刻み込む」という思いが形となったものである。

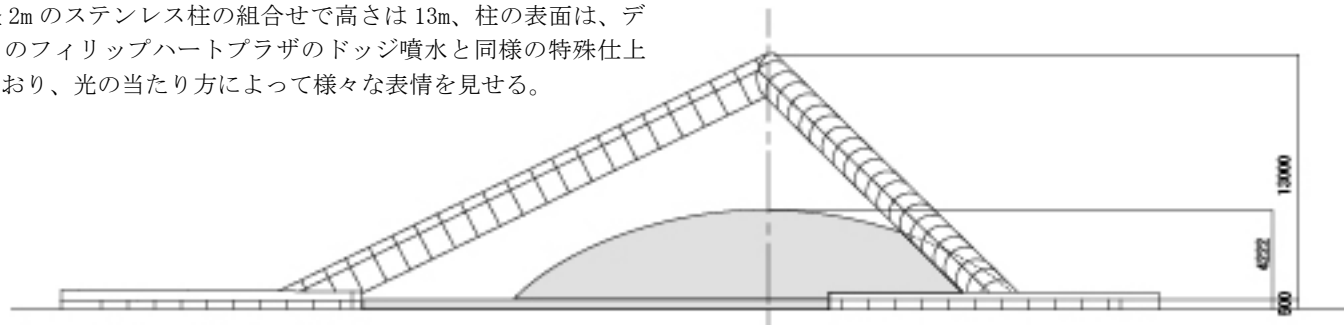
高さ30mのプレイマウンテンは、公園全体のフォルムに対して重要な役割を果たしている。この山の西側は、総重量3,000トン程の瀬戸内海の花崗岩の延段を三角形に積み上げ、ピラミッドの形に見える。また、東側は、緩やかなカーブを描く白い園路が山頂へと続き、誰もが誘われるように頂に向かう穏やかな山となっている。



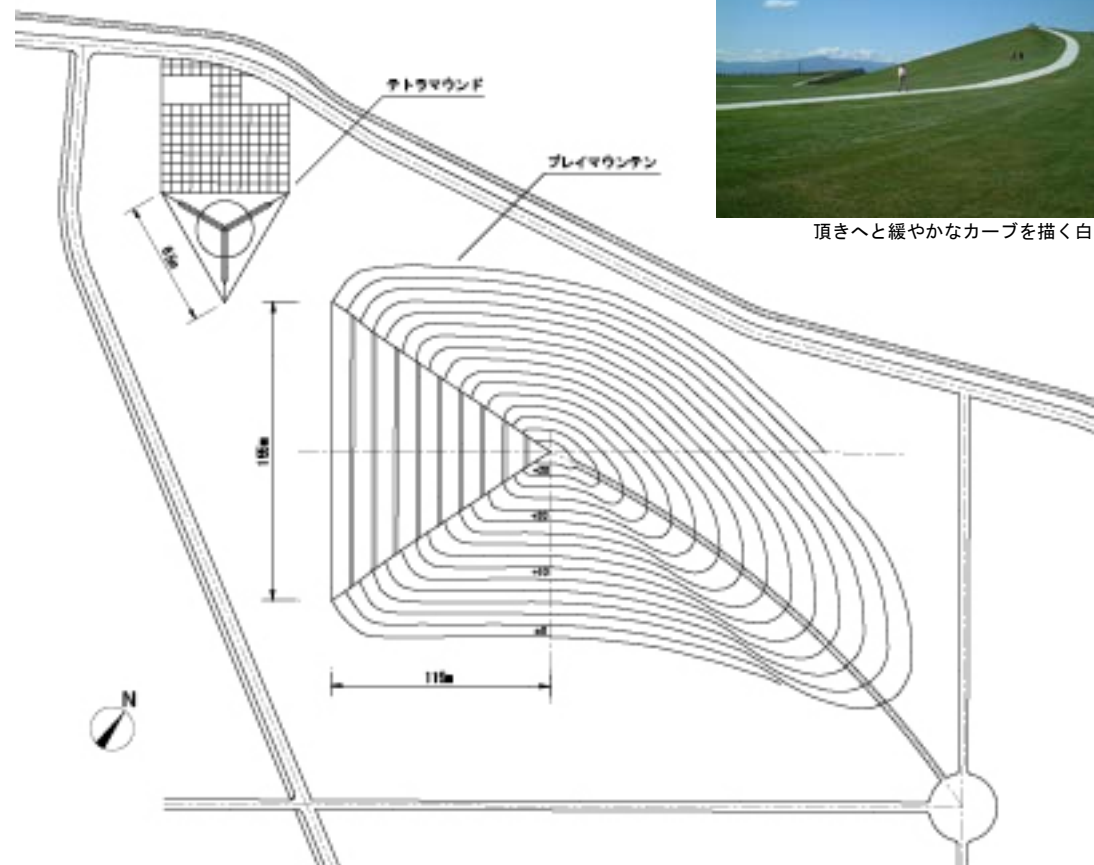
プレイマウンテン

【テトラマウンド】

モエレ沼公園で唯一彫刻的なモニュメントであるテトラマウンドは、直径2mのステンレス柱の組合せで高さは13m、柱の表面は、デトロイトのフィリップハートプラザのドッジ噴水と同様の特殊仕上げとしており、光の当たり方によって様々な表情を見せる。



S=1/400 テトラマウンド立面図



S=1/4,000 プレイマウンテン・テトラマウンド平面図



頂きへと緩やかなカーブを描く白い園路



テトラマウンド

【モエレ山の造成】

札幌市からの設計条件として大きな山を造る要請があり、ノグチは基本設計において、円錐台の古墳のような山とすることでこれに応えた。

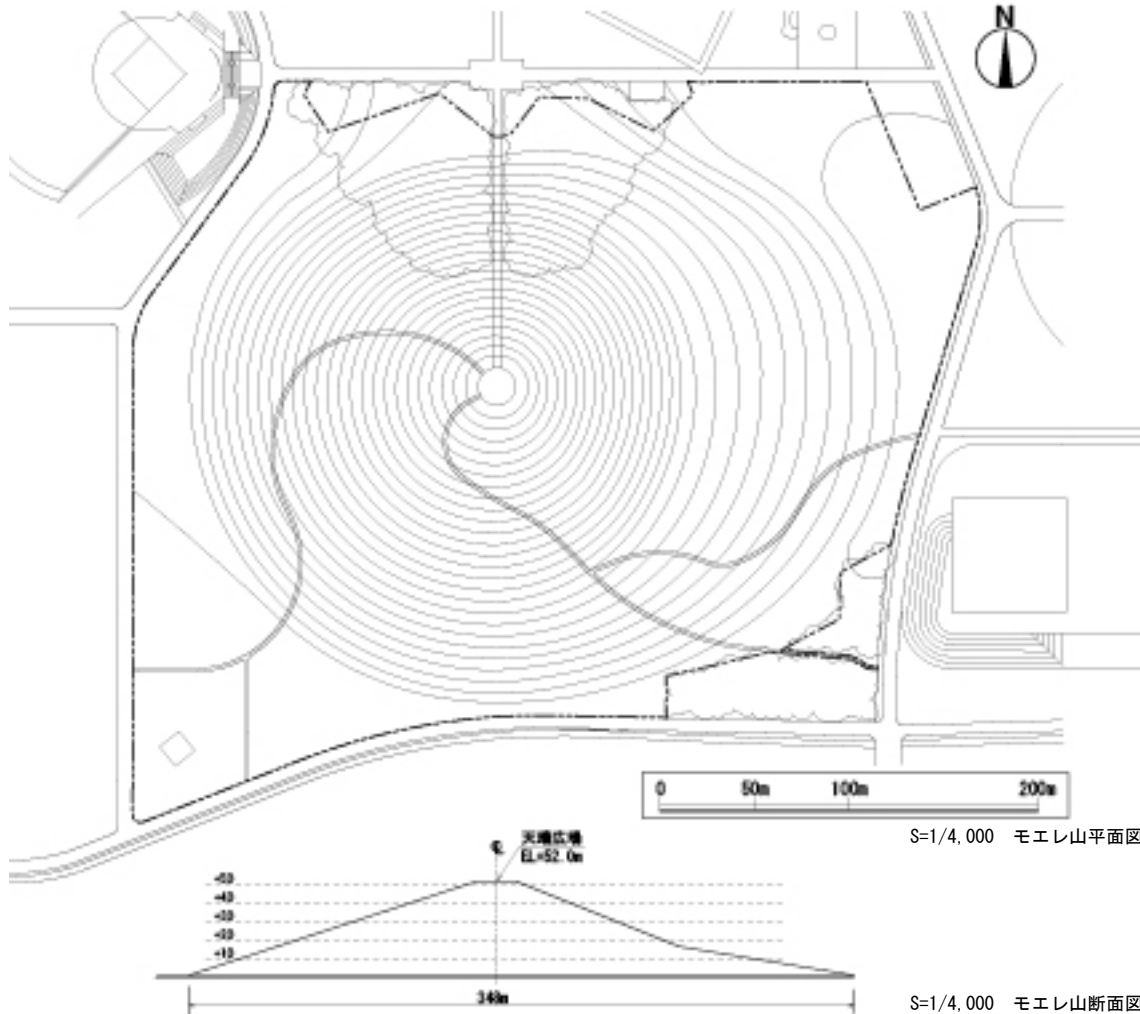
モエレ山はもともと、廃棄物処理場の跡地利用が事業の発端の1つであったため、標高12m

までごみ層を積み上げ、処理場事業の終了後は、市内の公共事業で発生する残土を何年もかけて積み上げて造られた。

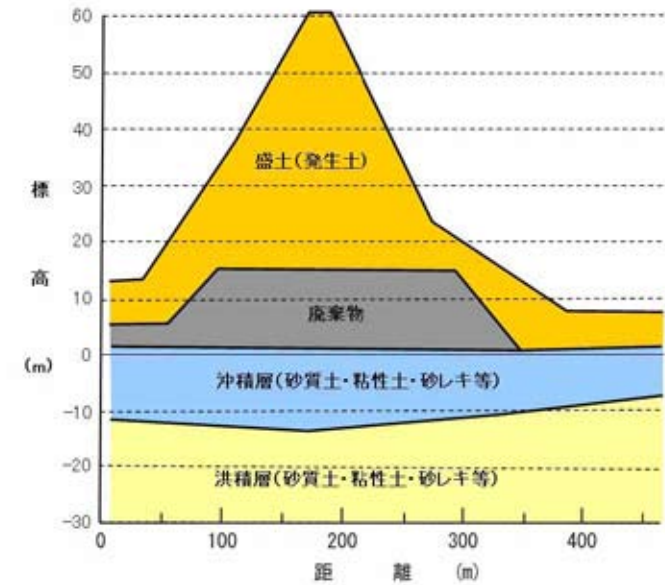
造成に際しては、元々の土地が軟弱地盤で、なおかつごみ層の上に大規模な盛土を行うという今までに経験のない工事であったことから、慎重に検討が重ね

られた結果、底面積7ha、高さ50mの見事な「山」が造成された。

標高62mの山頂では360度の展望ができ、市内の各所からのランドマークともなっている。



モエレ山



モエレ山の土層断面図

長崎水辺の森公園 / まちと港のネットワークを強化する水辺の空間



【沿革】

- 昭和 61(1986) 年 長崎都心・臨海地帯の再開発構想「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス 2001 構想」策定
- 平成元(1989) 年 構想の先行プロジェクトとして、長崎水辺の森公園を含む「長崎港内港再開発事業」に着手
- 平成 12(2000) 年 「環長崎港地域アーバンデザインシステム」が構築され、公園のデザイン検討・調整を開始
- 平成 16(2004) 年 「長崎水辺の森公園」が完成
- 平成 18(2006) 年 土木学会デザイン賞 優秀賞受賞



長崎水辺の森公園の俯瞰

【概要】

長崎の中心市街地は、地形的制約から都市機能が過度に集中し、オープンスペース不足が問題視され、長崎港の臨港部においては、工場や倉庫が建ち並び、かつて「鶴の港」と賞された港の眺望が遮られ、市民が憩える水辺の空間が渴望されていた。

こうした中、長崎の都市環境を改善し、活力ある都市の再生を図るため、昭和 61 年に長崎都心・臨海地帯再開発構想「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス 2001 構想」が策定された。長崎水辺の森公園はその構想の先行プロジェクト「長崎港内港再開

発事業」の一環として位置づけられていた。

構想策定後の社会経済情勢の変化に対応した計画の見直しが行われる中、平成 12 年、良好な都市景観を形成するための仕組みとして「環長崎港地域アーバンデザインシステム」が構築された。これにより、高い専門性や広い見識を有するアーバンデザイン専門家と、長崎県および設計事務所等のデザイナーが相互発的に意見交換を行うことを通じ、質の高い公園づくりが進められた。

こうした長年の取り組みの結果として、平成 16 年、長崎水辺

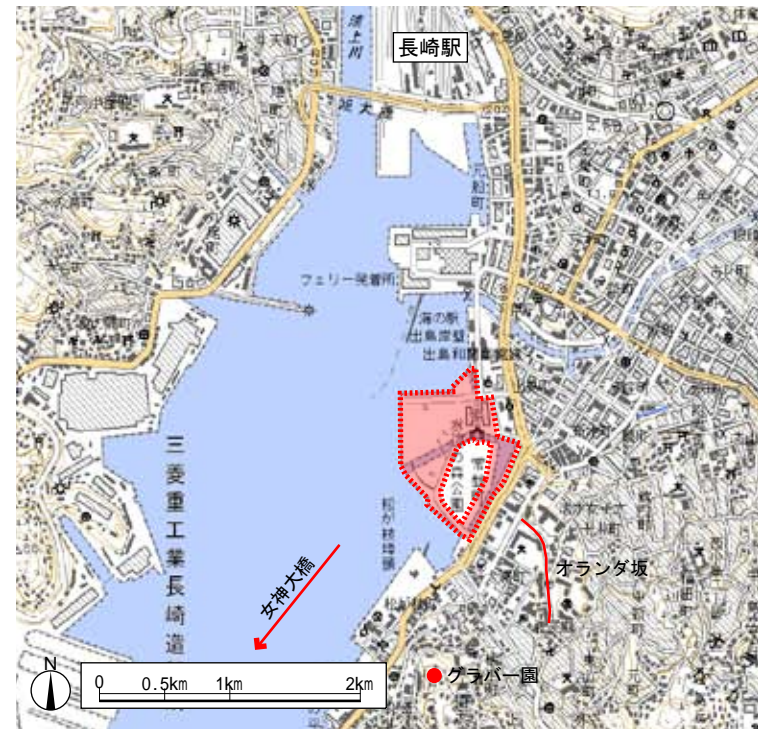
の森公園は開園した。

本公園は、都市デザインの観点から、環境面はもとより、歴史・観光面のポテンシャルが高い周辺地域の特性を生かし、景観性や機能性に配慮した質の高い空間が創出されている。

園内は、縦横に流れる水路により、まちに面する「水辺のプロムナード」、芝生広場と森で構成される「大地の広場」、山からの湧水を利用した「水の庭園」といった 3 つのエリア区分され、これらをヒューマンスケールの橋梁群が結び、歩を進める毎に様々な水辺の風景が展開する空間となっている。

【諸元】

- 所在地：長崎市常盤町 1-60
- 面積：約 6.5ha
- 施設：大地の広場、水の庭園
水辺のプロムナード、
レストラン、水の劇場、
駐車場（38 台）
- 事業主体：長崎県
- 設計者：伊藤滋（全体コーディネート）、篠原修（土木構造物のデザイン調整・指導）、石井幹子（照明デザイン）、上山良子（ランドスケープのデザイン調整・指導）、林一馬（建築デザインの指導・都市景観の誘導方針調整）他
- 管理者：長崎緑地公園管理事業協同組合



S=1/25,000 位置図

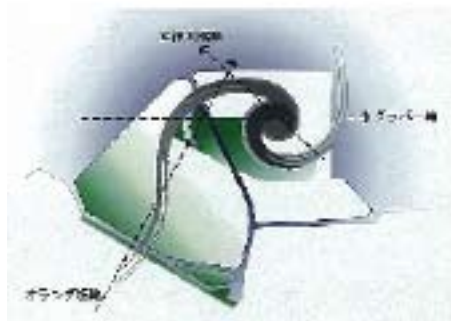
【3つの軸と二重螺旋軸】

～ランドアートとしての場づくり～

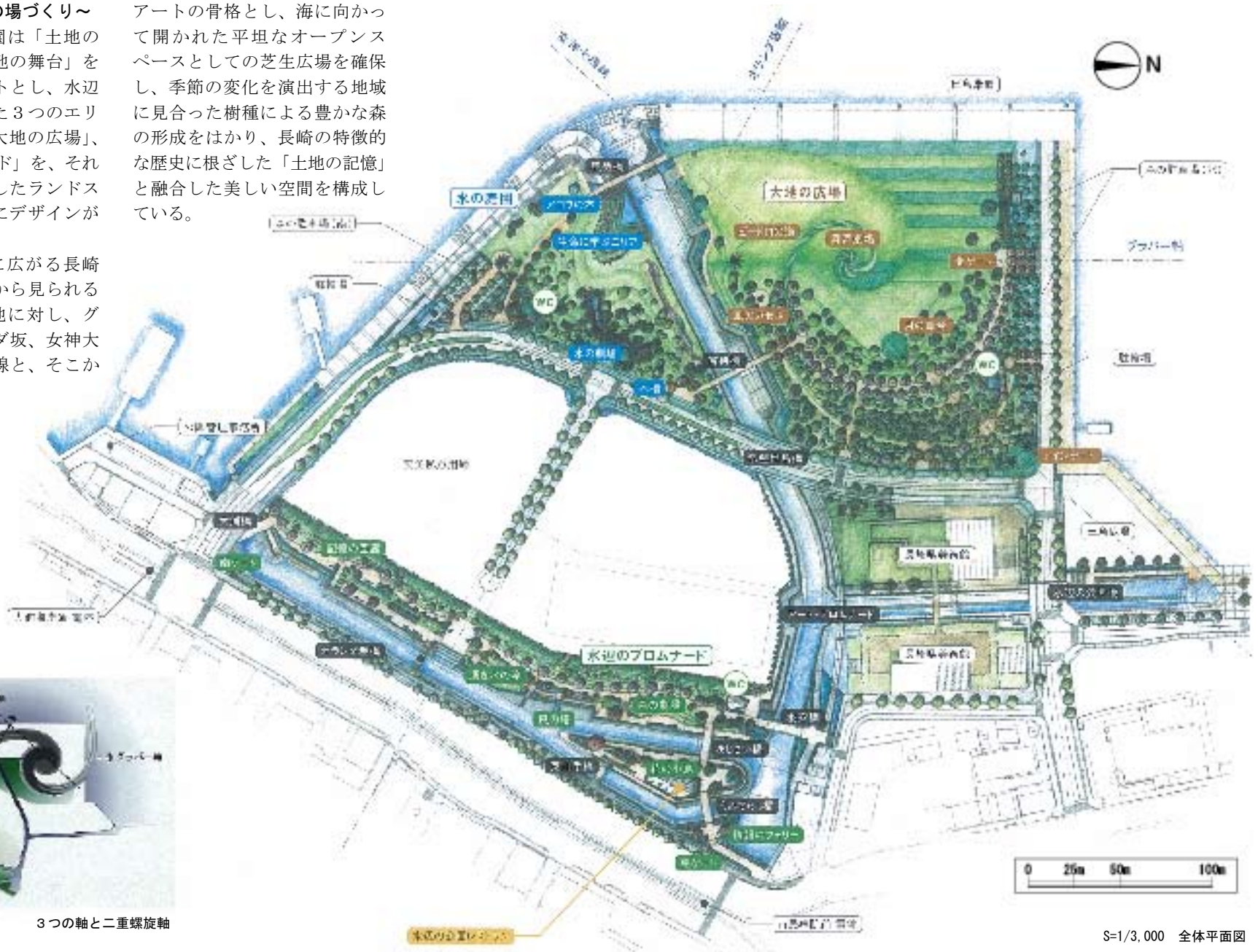
長崎水辺の森公園は「土地の記憶を継承する大地の舞台」をデザインコンセプトとし、水辺によって縁取られた3つのエリア「水の庭園」、「大地の広場」、「水辺のプロムナード」を、それぞれの特性を活かしたランドスケープとなるようにデザインが施されている。

入り組んだ地形に広がる長崎港の様々な視点場から見られる「舞台」となる敷地に対し、グラバー園やオランダ坂、女神大橋からの3つの軸線と、そこか

ら派生する二重螺旋軸をランドアートの骨格とし、海に向かって開かれた平坦なオープンスペースとしての芝生広場を確保し、季節の変化を演出する地域に見合った樹種による豊かな森の形成をはかり、長崎の特徴的な歴史に根ざした「土地の記憶」と融合した美しい空間を構成している。



3つの軸と二重螺旋軸

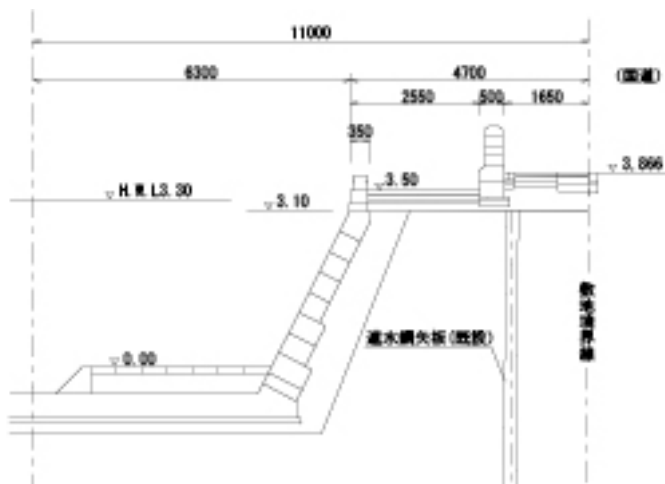


S=1/3,000 全体平面図

【水際のデザイン】

長崎の中心部には、地形的な制約などから港や海の風景を身近に楽しむ場所が少なかったことから、当地には、港町らしい風景を楽しむための場として、水際のデザインには特に配慮がなされている。

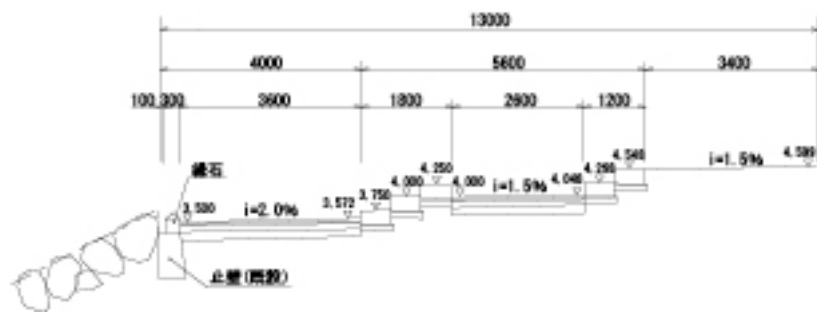
転落防止用の柵などは最小限に留め、縁石の設置や、水際の見通しをよくすることなどにより安全性を担保し、海や水路を臨む開放的な空間を形成している。実質的な利用と共に安全を促すサイン的な意味合いも含め、救命浮き輪を随所に設置していることも、安全への配慮と水際のイメージづくりに役立っている。



S=1/150 「水際のプロムナード」エリアの水路沿い断面図①



「水際のプロムナード」エリアの園路 防護施設を最小限にとどめることにより、良好な水際の眺望を確保している。



S=1/150 「水の庭園」エリアの水路沿い断面図①



「水の庭園」エリアの護岸部 海を臨む開放的な空間を形成している（右写真は、随所に設置されている救命浮き輪）。



【歩道橋群のデザイン】

園内の運河を渡る歩道橋群は、風景の主役である海、緑、運河を引き立て、それらとの関係を織り込みながら展開している。

対を為して海を見通せる橋、同色で運河を囲む橋、建築と一体となる橋など、「群」としての存在を示しながら、運河を巡る風景にあわせて様々な姿を見せ、また、公園内に留まらず、周囲に広がる風景や文化資産との繋がりや見直しをも考慮し、その形式や配置が考えられている。

大浦海岸沿いのオランダ坂橋・東山手橋（グループ①）はパリのサンマルタン運河を思わせるステップ式のアーチ、中央運河にかかる宵待橋・風待橋（グループ②）は透過性の高い細い上路アーチ、花の小島周辺のうみてらし橋・あじさい橋（グループ③）は花を引き立てる対の白色のラチストラス、羽衣橋（同じくグループ③）はランドマークを兼ねた中路フィーレンディール形式となっている。

これらは、小さな部材と丁寧なディテールで織り上げられ、臨港部に相応しい「現代」を表現しつつ、忘れられつつある「匠」の心意気と、橋が日常な道具であることを思い出させる。

常盤出島に生まれた繊細な橋梁群は、水や緑、そして憩う人々を透かし、港町長崎の美しい風景にとけ込む姿となっている。

（設計者：西村浩、寺田和己）

グループ①



オランダ坂橋



東山手橋

グループ②



風待橋



宵待橋

グループ③



うみでらし橋



あじさい橋



羽衣橋



【照明のデザイン】

新たな光の名所を創造し、長崎港全体の夜間景観の一端を担うことをめざし、園内の照明デザインにも配慮がなされている。

公園全体をそれぞれの特性に応じた4つのゾーンに区分し、暖かみのある白色を基調とした照明の演出がなされている。

女神大橋軸線付近には、「女神のトーチ」と呼ばれる女神大橋との関連性を意識した照明施設が設置されており、地域として一体的な夜間景観の形成に配慮がなされている。



メインゲートにおけるライトアップ

園内の橋梁群 風景の主役である海、緑、運河を引き立てつつ、それらとの関係を織り込みながら展開する。

震災復興小公園

／小学校と公園を組み合わせ配置した防災コミュニティ空間



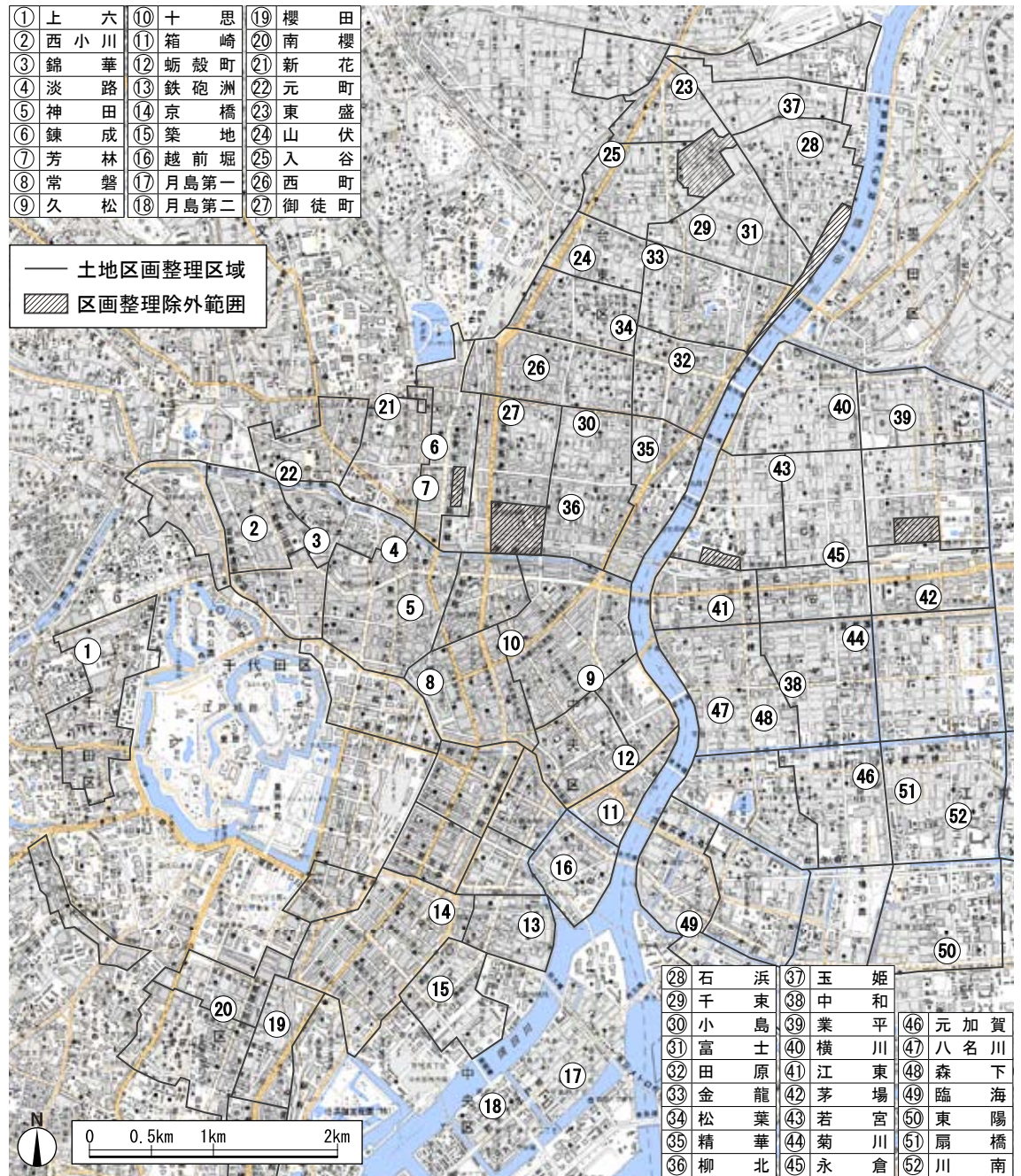
【沿革】

- 大正 12(1923) 年 関東大震災発生
- 大正 13(1924) 年 帝都復興公園の事業決定（計画者：後藤新平、佐野利器、井下清）
- 大正 15(1926) 年 52ヶ所の小公園が順次開園（昭和6年まで）
- その後、急速な発展の中で多くの公園は改変
- 昭和 60(1985) 年 文京区が元町公園を復元的に整備

【概要】

大正 12 年に発生した関東大震災により、東京市では市民全体の約 7 割にあたる人々が公園等に避難した。こうした被災時に果たす公園の効用が高く評価され、帝都復興の一環として公園計画が実施された。復興公園は国で施工した 3 大公園（隅田、浜町、錦糸公園）と当時の東京市において施工した 52 小公園よりなっている。

小公園は、地域コミュニティの拠点として隣接する小学校校庭と一体的な施設として、防災的な機能とともに教材園、運動場の補助となるように整備された。配置は児童数、校地の広狭、既設、復興大公園の位置を考慮して各区の配分数を定めた。また、公園の日当たりおよび学校の正面に位置することで利用性を高めるため、できるだけ学校の南側への配置を考慮している。概ね広場主体の公園であり、道路側は非常時を考慮して低い鉄柵とし、数箇所に門を設け、学校との境界は管理上必要な最小限の柵を設けているにすぎない。



震災復興小公園位置図

【小公園の配置】

52ヶ所の小公園は、当初7億円であった復興予算が4.7億円にまで削られるという厳しい状況の中で進められたが、小学校舎のコンクリート化と公園との一体化については、当初の計画通り整備が進められた。学校側から見るとこれら小公園は運動場や教材園の延長であり、公園から見れば隣に広い校庭があるという形で空地面積の拡大を図ることがその計画思想となっている。また、学校が開放されるときは地域のセンターとしても使え、校舎は不燃建築なので非常時には公園を含めて保安地となるものであった。

広さは900坪程度を標準にして大広場と幼児の遊び場と遊戯器具広場をつくり、夜の利用のために照明も整えた。トイレは管理事務所と一体にし、清潔なものにした。入口には自動開閉扉をつけ、季節にあった開園時間を定めて制限公開を行った。管理は区、学校、町会および管理事務所が共同で行うものとした。

学校小公園はその後、校庭とのけじめがつけにくいということから、境の入口が閉鎖されるものが増えてしまい、学校との一体化という理念は失われていった。また、戦後、小公園は次々と改造されていき、当時の姿を残すものは文京区の元町公園のみとなっている。

【元町公園】

元町公園は昭和5年に隣接する旧元町小学校と一体的に整備され、その後市から区に移管され、昭和60年の改修では公園の歴史文化的な価値を踏まえた復元的整備が行われた。昭和初期のモダンな意匠を留めており、敷地の高低差を利用したカスケードを設けるなど、原地形を活かしたオープンスペースが創出されている。

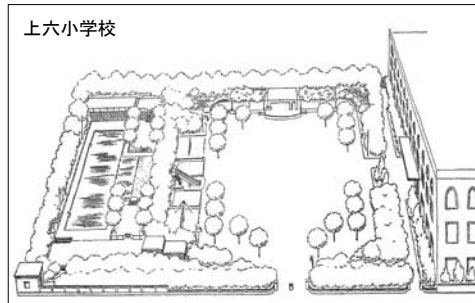
当初は校庭と連続していた広場は、時代を経て塀で仕切られるようになり、その後小学校も統廃合により閉校となった。

平成16年には東京都が公園を文化財の指定候補として打診し

たが、区は指定を見合わせた。その後、湯島の総合体育館改築にあたり、公園を、北側の小学校の敷地に移設する構想があり、地元などからは現状の公園を保存するための要望も出されている。



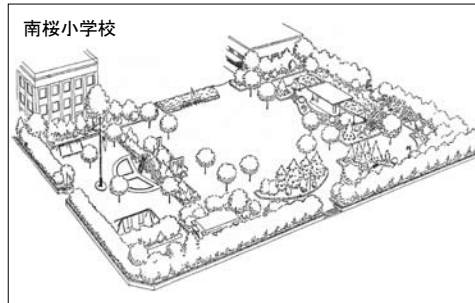
元町公園内階段



上六小学校



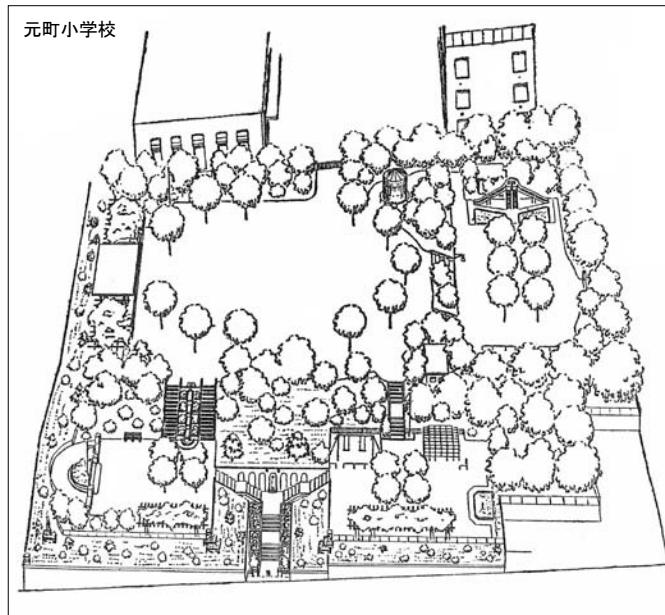
上六公園（現在の東郷元帥記念公園）公園の姿は変わったが、公園と学校との関係はそのまま継承されている。



南桜小学校



南桜公園 旧小学校の建物は港区住宅公社として利用されている。公園と建物との関係は、当初の面影が残されている。



元町小学校



昭和16年当時の本町公園周辺図（上図） 小学校の正門は東側にあり、学校の南側に配置された小公園と校庭が一体化している。高低差のある敷地に対し、地形を活かしたデザインを行っている（左写真参照）。

多摩ニュータウン・港北ニュータウン／街づくりのシステムとして計画・実践されたオープンスペース



多摩ニュータウン 落合・鶴牧地区



多摩ニュータウン 稲城向陽台地区



港北ニュータウン 鴨池公園付近（Ⅱ地区Dゾーン）

【沿革】

■多摩ニュータウン

- 昭和 37(1962)年 開発構想
- 昭和 38(1963)年 新住宅市街地開発法発布
- 昭和 41(1966)年 事業承認・工事着手
- 昭和 46(1971)年 諏訪・永山地区街開き（第1次入居：2538戸）
- 昭和 57(1982)年 落合・鶴牧地区（10, 11住区）第4次入居開始
- 昭和 63(1988)年 向陽台地区（1住区）第7次入居開始
- 平成 18(2006)年 事業完了公告

■港北ニュータウン

- 昭和 35(1960)年 開発構想（横浜市6大事業発表）
- 昭和 49(1974)年 事業認可・工事着手
- 昭和 56(1981)年 第1次供用開始（第2地区・100ha）
- 昭和 58(1983)年 集合住宅第1次入居開始
- 平成 5(1993)年 地下鉄3号線開通
- 平成 8(1996)年 換地処分公告

【諸元】

■多摩ニュータウン

- 所在地：東京都八王子市、町田市、多摩市、稲城市
- 面積：2,892ha（計画面積）
- 事業主体：住宅・都市整備公団（現 都市再生機構）、東京都

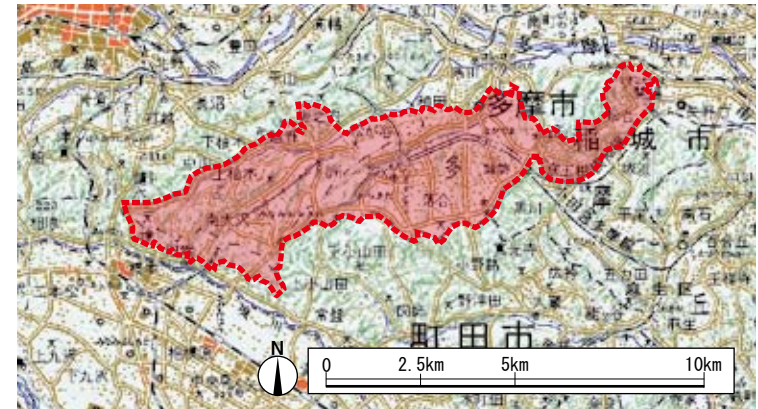
■港北ニュータウン

- 所在地：神奈川県横浜市都筑区
- 面積：1,317ha（事業委託面積）
- 事業主体：住宅・都市整備公団（現 都市再生機構）、横浜市
- 設計者：上野 泰（落合・鶴牧地区、港北NTの全体計画）、曾宇厚之（全体計画）、松崎 喬（落合・鶴牧地区の全体計画、植栽計画）

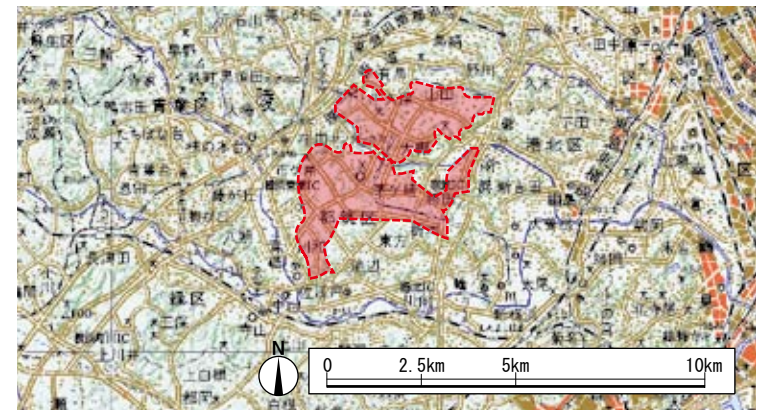
【概要】

戦後の経済の復興により、昭和30年代の首都圏では深刻な住宅難となり、東京の多摩地域や横浜の港北地区等の丘陵・田園地帯において無秩序な開発が進行した。このような乱開発を防止すると共に、良好な居住環境や大量な宅地供給に対応することを目的に、多摩ニュータウンは昭和40年（1965）に都市計画決定、翌41年、新住宅市街地開発法に基づく事業承認を経て約3,000haの大規模ニュータウン事業が開始された。

また、港北ニュータウンは昭和44年（1969）都市計画決定、昭和49年、土地区画整理法に基づく事業計画認可を経て約1,300haに及ぶ我が国最大級の区画整理事業が着手された。



S=1/200,000 位置図（多摩ニュータウン）



S=1/200,000 位置図（港北ニュータウン）

【多摩ニュータウンにおけるオープンスペース計画の変遷】

(1) 第一期－近隣住区理論の適用 (1960～1975年)

大都市近郊における初期の住宅団地では、住区の構成をいかにするべきかが重要な計画課題であった。そこで、人口1万人の小学校区を単位とした半径500mの徒歩圏内にオープンスペースを配置する「近隣住区理論」が適用され、その基本パターンが形成された。なお、オープンスペースは住区単位で個々に独立したものであった。

(2) 第二期－ネットワークの形成 (1972～1980年)

大規模団地の開発が進むなかで、歩行者の安全にも配慮して、各種の住区施設と一体化する歩行者専用道路が出現した。従来の誘致距離に代わり、快適な環境形成のための公園を核とする歩行者専用道路によるネットワーク化が進められた。

(3) 第三期－住区の構造化 (1978～1988年)

大規模開発による形成されるニュータウンを、固有の「街」としてイメージさせる手立てとして、各種の統合されたオープンスペースをネットワークさせ、視覚的に一体感を持った景観を形成することによって住区の構造化が図られた。そこではデザイン性が重視され、その代表が「落合・鶴牧地区」である。

(4) 第四期－地域環境構造の保全 (1985年～)

大規模なニュータウン開発に伴う自然環境のポテンシャルの低下が問題となり、地域環境を保全し、良好なものとするのがオープンスペース計画の課題となった。そのため、住区の構造化を図ると同時に、地域の環境構造を形成している土地条件の保全を目的とした計画が立案された。そこでは地形秩序と植生保全が重要視され、その代表が「稲城向陽台地区」である。



歩行者専用道である富士見通りからの富士山の眺望

【落合・鶴牧地区】

(1) 住区の構造化

多摩ニュータウンの「落合・鶴牧地区」は、従来の住宅団地の集合体を脱却し、「街らしさ」を追究するための構造化理論のケーススタディとして、具体的な空間における景観の計画とデザインが展開されている。

当地区における地区の構造化は、「①地域的なスケールにおける景観的要素のとりこみ」と「②地区のスケールにおける基幹空間の形成」という2つのスケールでの対応がなされ、街の空間構成を視覚的に認識し得るような包括的な景観を創出することが試みられた。

この「基幹空間」は、公園緑地を主要な要素とするため、2系統の歩行者専用道路を介して、4つの近隣公園と2つの児童公園を連続的に配置し、これまでにない利用形態と景観形成が達成されている(右上図参照)。

(2) 地形と緑

落合・鶴牧地区では、地区周辺に原地形を残すのみの造成基盤が用意され、公園緑地は人為的にデザインされた地形造成がなされた。ここでは全面的にデザイン性が重視されている。



【稲城向陽台地区】

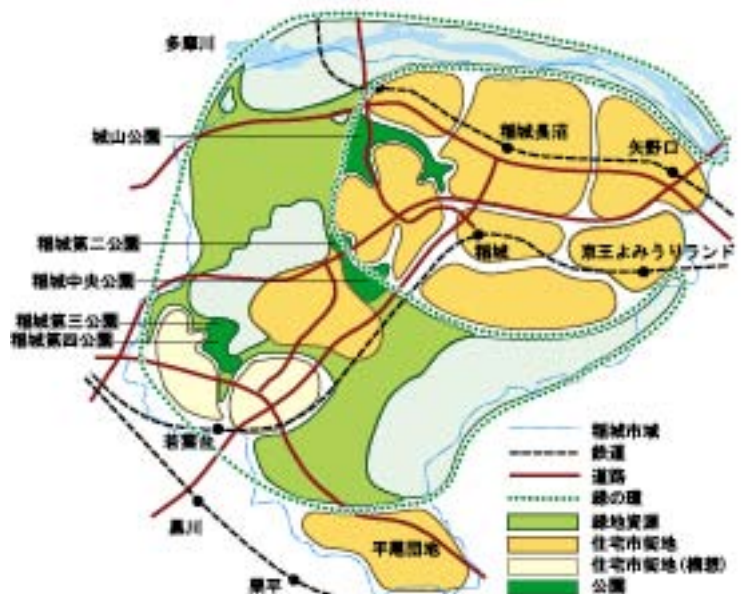
(1) 地区内外の緑地構造の連担
多摩ニュータウンの稲城向陽台地区は、構想段階から稲城市の街づくりの一環として地域環境の保全に貢献する計画とすることを意図しており、地域と住区という異なる空間レベルを統

括する新たな地区構造をオープンスペースによって形成することが試みられた。

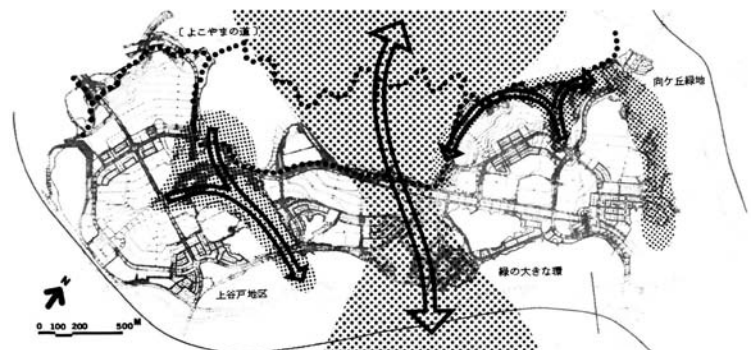
具体的には「緑の環」と呼ばれる地域環境構造を具現するため、地区北側に連続する緑地の保全を図るとともに3つの住区を分節する位置に公園緑地を配

置し、南北方向の緑の貫入閥を形成している。

また、東西方向に分節された住区相互の連繋を図るために、住区幹線道路の歩行者空間を強化したブルバール（並木道）を生活環境軸として位置づけ、配置している。



「緑の環」に基づく地域環境構造



オープンスペース計画基本構想図 「緑の環」の貫入を担保する公園緑地が配置されている。



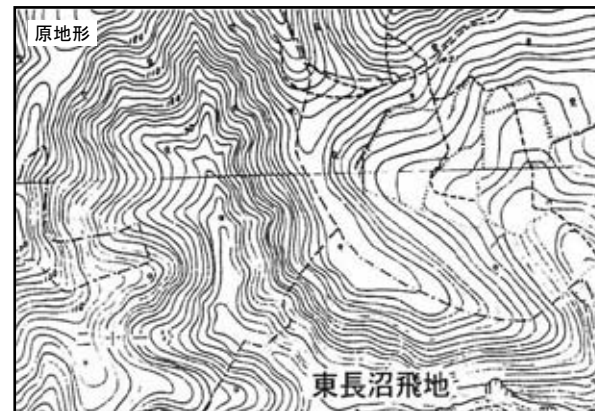
(2) 地形と緑

稲城向陽台地区では、1974年の「現況緑地資源の活用に関する調査研究」で、緑地資源の基盤の地形の残し方・残され方を整理し、現況植生を開発後の動向を見極めて調査している。そして、緑地資源の有効にして効果的な活用保全の検討を行い、地域環境に鑑みたオープンスペース計画を都市計画に先駆けて提案している。

その結果、尾根・谷地形が残され、地域を骨格づけてきた地形秩序が全うされている。



生活環境軸



尾根地形の保全

【港北ニュータウン】

(1) 地区構造

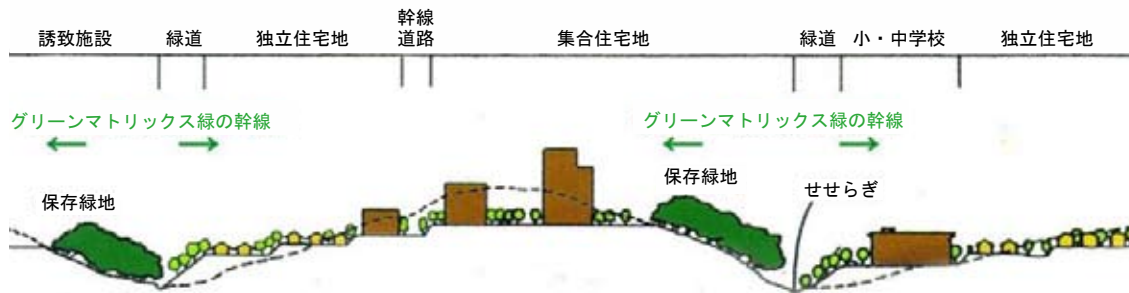
港北ニュータウンでは、なだらかな丘陵地の現況の緑を活かし、保存緑地を主体とする公園・緑道を主軸として、集合住宅・学校・施設用地などの斜面緑地、さらには、社寺林などの民有地の緑を連担させて、まとまりある緑空間の保全と人の利活用を最大限に結合した「グリーンマトリックスシステム」による計画が展開されてきた。

地形の襲や、農村集落の景観、寺社の緑を環境資産として、これらを街の空間構造に活かし、緑に囲まれた安全で快適な歩行者動線や、都市防災にも寄与するオープンスペースを確保している。

このように、当地区では既存の緑環境を最大限に保全すると共に、多様な土地利用によりオープンスペースを確保し、「ふるさとをしのばせるまちづくり」を実現させている。



「グリーンマトリックスシステム」の概念に基づく緑空間の構成



造成断面イメージ図 既存の緑を最大限に保存するため、斜面の樹林は残し、谷を埋める時はV字谷をつくるように造成されている。

(2) 緑地資源の活用

緑地資源の活用はオープンスペースに既存林を地形ごと残すことで満足することなく、造成に掛かる既存木の移植も行っている。事業認可の当年（昭和47年）から調査を実施し、特に地域特性、歴史的履歴、時間蓄積を重視し、大径木の移植を優先しており、最終的に5,000本の移植が実現している。



具体的な土地利用や緑の保存状況

(3) モデル整備

ニュータウンの最初の公園整備は昭和53年のせせらぎ公園である。事業推進のためには大方の合意を得る必要があり、ニュータウンが将来どのような街になるかを実際に示すために街開きに先駆けて整備された。移植された株立ちの見事な大径木が惜しげもなく使われている。



モデル整備されたせせらぎ公園（左写真）と付随する緑道（右写真）

大清水空間 / 水の小空間のネットワークによる旧城下町の再生



【諸元】

所在地：福井県勝山市本町
 面積：100 m²（源泉部広場）
 480 m²（大清水広場）
 延長：180 m（大清水水路）
 事業主体：福井県 勝山市
 設計者：小野寺康都市設計事務所
 管理：勝山市 都市整備課

【概要】

勝山城とその城下町は、天正8(1580)年に柴田勝安が居城を築き始めたのが起源だが、未完成に終わった。元禄4(1691)年に入府してきた小笠原貞信が再建を始めたことにより、その基盤が築かれた。城下町主要部では道路中央に用水が引かれ、飲料、防火、排雪などに用いられていた。

こうした用水の1つである後町の大清水は、近隣住民の飲料水や洗い物の場として長年利用されてきた。その後、水量の減少や水道の発達と共に、あまり

利用されず荒れたままになっていた。

中心市街地である旧城下町において、歴史文化を生かしたまちづくりとして総合支援事業（後にまちづくり交付金事業に切替え）が策定され、九頭竜川に並行する南北方向の本町通り、後町通り、河原町通りの三本の通りを軸に、これと交差する複数の街路や広場が位置付けられた。

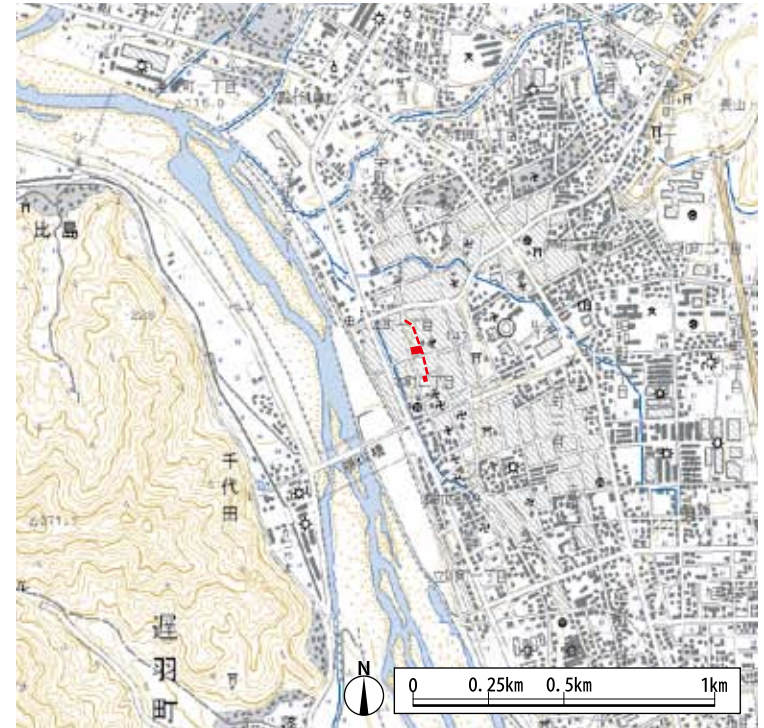
この事業の一環として、大清水付近一帯が改修され、新たな市民の憩いの場として生まれ変わった。

【沿革】

- 平成 15(2003)年 「旧勝山城下周辺地区 まちづくり事業計画」がまちづくり総合支援事業として認可され、東京大学景観研究室（篠原修教授・当時）に調査を依頼
- 平成 16(2004)年 「都市再生整備計画 旧勝山城下周辺地区」がまちづくり交付金事業として再認可される（対象：大清水緑地、大清水広場、市民交流広場、案内サイン、市道12路線、大清水空間）
地元住民ワークショップ「まちなか整備推進会議」を重ねながら、設計が進められる
- 平成 17(2005)年 大清水広場・大清水空間施工開始（7月末竣工）
竣工式に合わせ大清水祭りが催される（7月30・31日）
- 平成 18(2006)年 大清水緑地竣工、大清水空間に接する、市道の一部路線（7-10号線、7-11号線、7-12号線）が竣工



勝山の家並み



S=1/25,000 位置図

【全体計画】

勝山市中心市街地の再生整備計画において、その手始めとして、大清水空間の整備に着手された。旧市街の歴史的シンボルともいえる大清水源泉部とそこから流れるせせらぎ、せせらぎに接する大清水広場、せせらぎと交錯する細街路網、これらを一体的に整備することで、勝山再生の基軸とした。

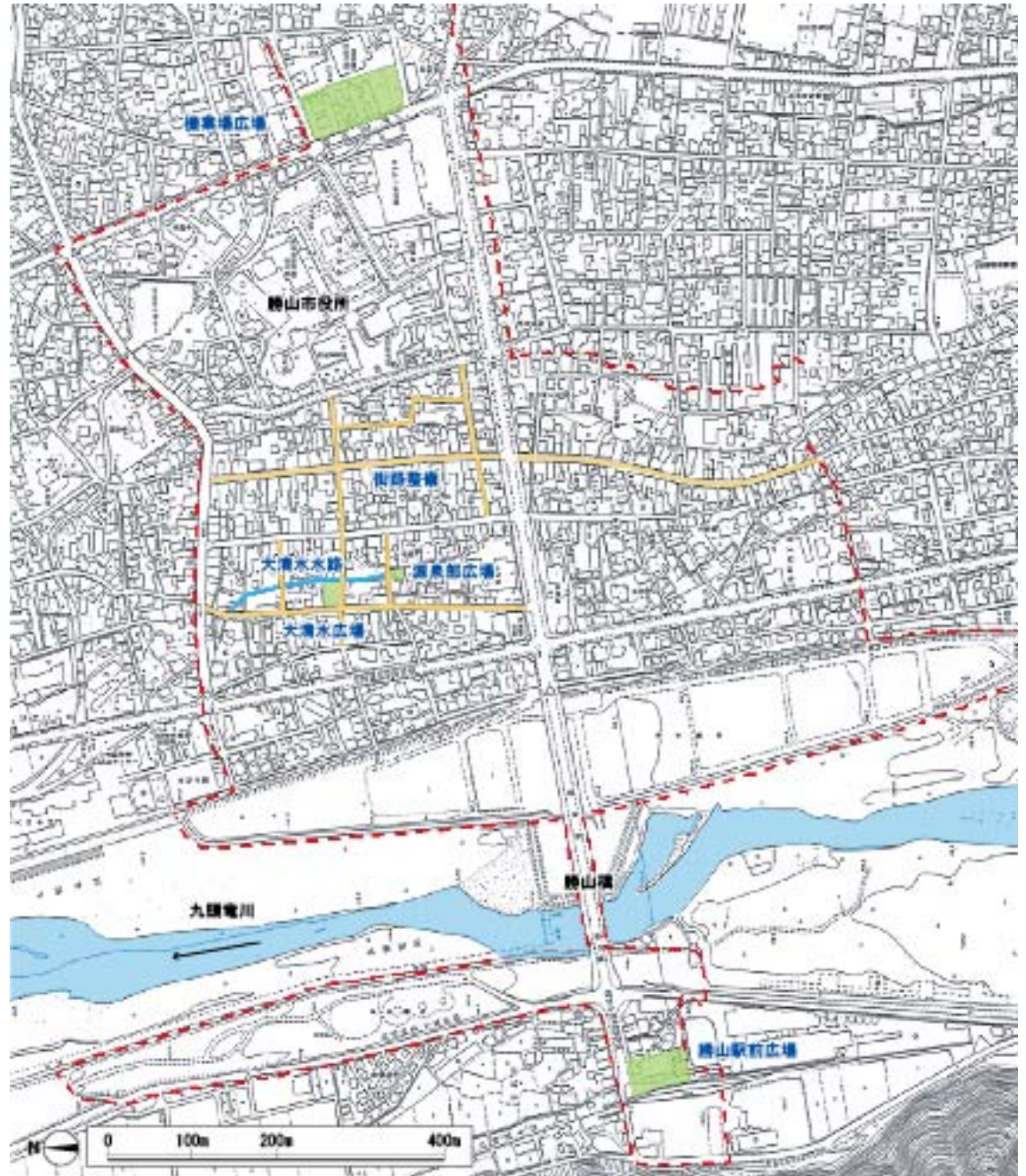
【市民ワークショップ】

徹底した市民参加が特徴で、全てのデザインはワークショップを経て決定された。その手法は、市民の要望を聞いて、それを取りまとめるだけの「責任回避型」ワークショップとは根本的に異なり、住民意見を聞き取りつつ専門家が案を構想し、スケッチや模型を多用しながらワークショップに臨んだ。

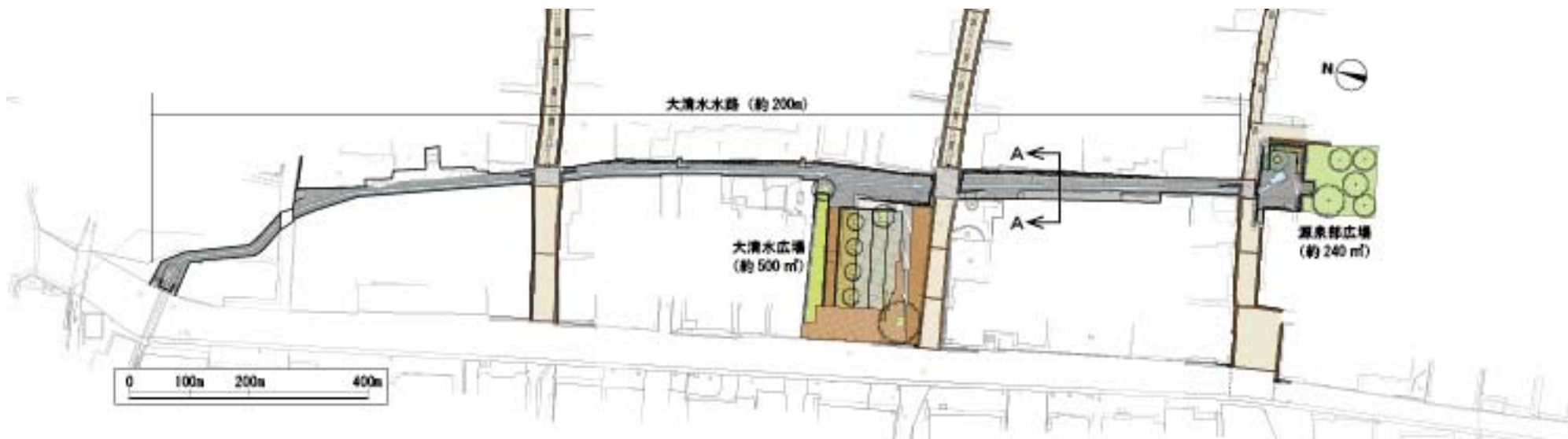
専門家 VS 市民の真剣勝負の様相であり、時に大きな議論に発展したが、デザイナー側も提示案に固執せず、取り入れるべき有用な意見が出ればためらいなくデザインを変更するという姿勢を示すことで、議論は高まり、デザインは洗練されていった。



ワークショップにおける議論の高まりにより、デザインは洗練されていった。



S=1/8,000 全体計画図



S=1/1,000 大清水周辺平面図

【大清水・水路部】

U字溝のごときであったせせらぎは、玉石積みに変えられ、これに沿う歩行路も、越前瓦で整えられ、

既存の玉石積み擁壁の足元を、越前瓦のベンチ擁壁で引き締

め、ここにフットライトを組込むことにより、趣のある夜間景観が創出された。

水路と路地が交差する箇所は、全てに石階段が設けられ、街のどこからでも、せせらぎにアクセスできる形となっている。

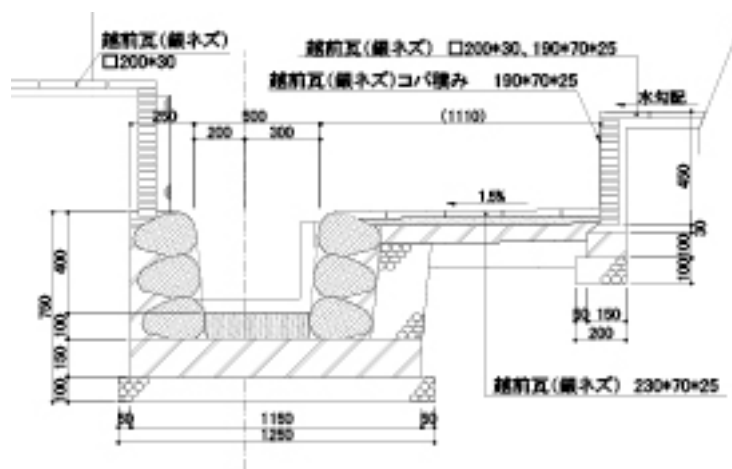


【源泉部広場】

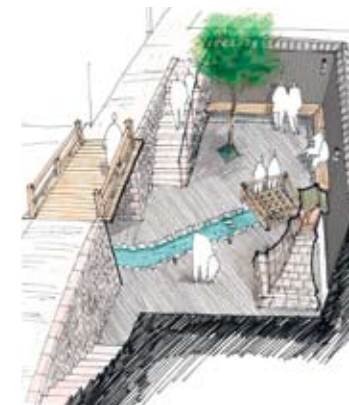
大清水空間の源泉部は、旧城下町に暮らす勝山市民にとって、歴史的なシンボル空間であった。そこで、隣接する用地を一部取得して広場スペースを拡充し、ベンチなど休憩施設が設置された。

石壁は全て積み直され、祠もその中に収められたことにより、湧水の周りに、ゆとりを持った憩いの空間が創出された。

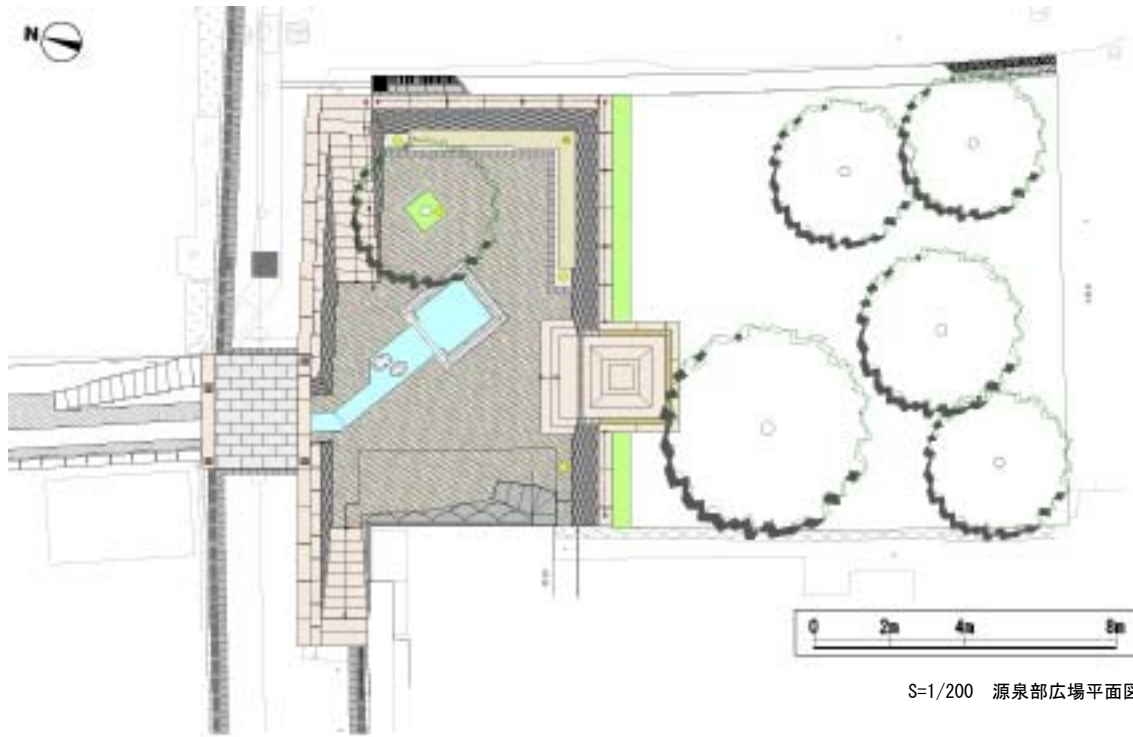
舗装には銀鼠色の越前瓦を敷き詰め、橋も架け直し、そこから水辺に降り立つ階段も新設された。同一視野に入る対象全てを、統合的にデザインすることが重要であることを示す好事例となっている。



S=1/30 大清水水路断面図 (A-A)



源泉部広場の模型、スケッチ



S=1/200 源泉部広場平面図

【大清水広場】

大清水広場は、街角の駐車場を再生した市民広場である。

街に完全に開いたオープンタイプで、地域イベントの舞台としても多用されている。

水路部は比較的広い親水テラスとなっている。大清水のせせらぎは、かつては一部で二股になっており、一方を食材用、他方を洗物用に使い分けられていたという。ここでは、その雰囲気を実現したデザインとなっている（P.36 左上写真参照）。



整備前



整備後の大清水広場



大清水広場の模型

【小路空間】

水路に交差する、橋通り、おたね坂、吾妻橋通りといった小路空間は、消雪装置を導入しながら、機械除雪も可能な耐久性を有する南条石のコンクリート洗出し舗装で再整備されている。

街渠は、無釉の越前瓦コバ立であり、舗装のボーダーも同様の地場材料でデザインされている。



整備前



整備後の小路空間



源泉部広場



【緒元】

所在地：愛知県豊田市
 面積：約1.9ha
 施設：五六川（近自然型小川216.5m）、池、多目的広場、管理事務所（ちごの庵）等
 設計者：（関係者）早川 匡、中根 録一、杉山 亘、成瀬 順次、鈴木 元弘、児ノ口公園管理協会、バイオフィット研究会、豊田市矢作川研究所
 管理：豊田市

【概要】

五六川は、戦後頃まで用排水路として利用されていた小川であるが、昭和30年代、グラウンドや市営プール等をつくるために暗渠化された。

平成に入り、都市河川の水質浄化のために矢作川の水を市内に導入することが計画された。それを契機に、五六川を開渠化して地上に再生すると共に、都心に水と緑を取り戻し、やすらぎを生み出すことを目的として児ノ口公園の大改修を行うこととなった。

公園の改修にあたっては、か

つての自然豊かな五六川の復元を目指した「近自然工法」が取り入れられ、水路の蛇行や瀬・淵、あるいは止水域など、多様な流れをつくり、魚の産卵場所や生息空間を創出した。

また、公園内にあった野球グラウンドや市営プールは撤去され、里山の雑木林をつくるために約8,000本の苗木が植栽された。さらに、ブランコ、砂場、ジャングルジムなどの遊具も撤去され、児ノ口公園は近自然型の都市公園として新しく生まれ変わるようになった。

【沿革】

- 戦前（1940年以前） 五六川沿いに広がる田園地帯であった
 戦後（1945年以降） 地域住民の勤労奉仕により、現在の児ノ口公園の場所に子供の遊び場が造成され、その後、五六川は暗渠化され、グラウンド、プールなどを備えた公園が完成
 平成14（1992） 五六川の再生とあわせた児ノ口公園の改修計画が検討され、住民説明会を実施
 ～15（1993）年
 平成16（1994） 2ヵ年をかけて住民参加により近自然型公園としての整備を実施
 ～17（1995）年
 平成16（2004）年 土木学会デザイン賞 最優秀賞受賞



市民による植樹会の様子
 管理事務所兼休憩所の「ちごの庵」に飾られている写真。地域の自治区、老人クラブ、子供会、商店街の主催により開催され、子供からお年寄りまで約200人の参加を得て盛大に行われた。



S=1/25,000 位置図

【近自然型公園の計画】

改修前の児ノ口公園は、運動施設と遊具を備えた典型的な都市公園の形態をしていた。こうした公園の再整備にあたり、「公園の野生化」を目指した計画は、当初、理解されにくいものであった。

豊田市は、児ノ口公園を近自然型の公園として再整備するにあたり説明会を開き、市民の理解と協力を求めた。説明会を始めた頃は、近自然型の公園とすることについて反対意見も多かった。特に、これまで低料金のプールやブランコ、滑り台といった遊具のあった公園が一変してしまうため、子供の遊び場がなくなってしまうのではないかといった意見も多く出された。

そんな中で、五六川の原風景を知るお年寄りには計画に理解を示し、「何もなくても山と川さえあれば子供達は遊ぶことができる」と主張するようになった。お年寄りたちの、かつてのような自然にあふれた風景を今の子供たちに残してあげたいという思いが、新しい児ノ口公園を実現させる力となった。

【市民参加】

実際に工事が始まると、お年寄りたちを中心とした数多くの「現場監督」が現れ、現場での市民参加による公園づくりが自然にはじまった。そして五六川につくったビオトープを田んぼに

したり、休憩所として「ちごの庵」を建ててしまうなど、「現場監督」たちの昔の記憶と勢いで公園が出来ていった。

そうした市民と公園との密な関係ができあがっていく中で、自然な流れで住民が管理を行う

ための組織（児ノ口公園管理協会）が誕生し、公園の日常的な管理だけでなく、さまざまな催し物の運営を行う組織に発展していった。

児ノ口公園は、市民が自分たちの手で緑と小川を再生したこ

とに誇りと愛着を持って管理、運営している。そうした流れがしっかりできあがったことに大きな意味があるといえる。



S=1/1,200 改修後の児ノ口公園平面図



戦後の五六川（1947年撮影） 周辺には田園風景が広がっていた。



改修前の児ノ口公園（1987年撮影） グラウンド、遊具、プールのある典型的な都市公園であり、周辺は緑が少ない市街地であった。



現在の児ノ口公園（2000年撮影） 改修により、市街地に雑木林をつくり出した。



道路境界 道路から公園へは、どこからでも自由に入出入りすることができ、歩行者が自然環境に誘導されるような雰囲気をつくっている。また、自然豊かな公園ができたことにより住環境も良くなり、隣地にそれを売りにしたマンションが建ち、地価も上昇した。



市民によってつくられた田んぼ 餅米が育てられ、秋には収穫、年末には餅つき大会のイベントが開催されている。



国道153号から見た児ノ口公園 交通量の多い国道沿いに豊かな緑を提供している。



公園内の休憩所（ちごの庵） 管理を委託されている児ノ口公園管理協会の事務所にもなっている。

【公園分野】引用・参考資料リスト

種別	文献名	編著者	出版元	年次	備考
■西都原古墳群					
参考	西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画	宮崎県教育庁文化課	—	1995年	
参考	西都原古墳群及びその周辺地域整備プロジェクト推進計画書	宮崎県・西都市	—	1999年	
■上野公園					
参考	ビジュアル台東区史	台東区史編纂専門委員会	東京都台東区	1997年	
参考	上野公園ものがたり	(財)東京都公園協会	—	1996年	
■砧公園					
参考	砧公園	石内展行・板垣修悦	東京都公園協会	2003年	
参考	東京の公園と原地形	田中正大	げやき出版	2005年	
参考	水元公園	中島宏・桜田通雄・山口善正	東京都公園協会	1997年	
■アルテピアッツァ美唄					
参考	安田侃の芸術広場 アルテピアッツァ美唄	北海道新聞社	北海道新聞社	2002年	
■古河総合公園					
参考	湿地転生の記	中村良夫	岩波書店	2007年	
参考	研ぎすませ風景感覚2 国土の詩学	中村良夫	技報堂出版	1999年	
■モエレ沼公園					
参考	土構造物の景観設計 8. 処理場跡地の景観(「土と基礎、50-4(531)」P. 36~39)	田村幸久・石村寛人	—	—	
参考	イサム・ノグチ&札幌モエレ沼公園	札幌テレビ放送(株)	札幌テレビ放送(株)	2005年	
参考	イサム・ノグチ 宿命の越境者	ドウス昌代	講談社	2003年	
■長崎水辺の森公園					
参考	DESIGN SELECTION 2006	土木学会景観デザイン委員会	—	2007年	
参考	環長崎港アーバンデザインシステム【改訂版】パンフレット	長崎県 景観まちづくり室	—	2007年	
■震災復興小公園					
参考	東京公園史話	前島康彦、東京都公園協会	—	1989年	
■多摩ニュータウン・港北ニュータウン					
参考	多摩ニュータウン稲城地区(B-6地区)公園緑地整備基本計画策定調査報告書	住宅・都市整備公団南多摩開発局 (社)日本公園緑地協会	—	1983年	
参考	オープンスペース環境施設計画資料集	南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会	(株)オーム社	1997年	
参考	オープンスペース環境施設ディテール集	南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会	(株)オーム社	1998年	
参考	港北地区オープンスペース計画・設計技術資料集	住宅・都市整備公団神奈川地域支社港北開発事務所	—	1998年	
■大清水空間					
—	—	—	—	—	
■児ノ口公園					
参考	中心市街地が「元気になっちゃったかも!!」	豊田市資料	—	—	
参考	豊田市ホームページ(http://www.city.toyota.aichi.jp)	—	—	—	
参考	あいち地域資源デジタルアーカイブ(http://www.aichi-irda.jp)	—	—	—	
参考	『DESIGN SELECTION 2004』	土木学会景観デザイン委員会	—	2005年	

※種別：「引用」—文献中の文章をそのまま引用している文献(※引用文の掲載ページを文献名欄に記載する)

「参考」—事例集作成の際に参考とした文献

※備考：種別「引用」の場合、事例集の掲載場所(P. 00、00~00行目)を備考欄に記載する。

【公園分野】図版出典リスト

■西都原古墳群							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
2	鏡写真／鳥瞰	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	-	-	-
2	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/50000地形図を元に、加筆・トレース	-	-	2007
3	鳥瞰写真	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	-	-	-
3	畑と古墳群	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
3	園路と古墳群	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
4	平面図	図	国土技術政策総合研究所	宮崎県都市公園総合事務所より入手した「特別史跡公園 西都原古墳群管理区域平面図」を元に、加筆・着色・トレース	-	-	2007
5	鬼の窟古墳写真	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	-	-	-
5	菜の花	写真	西都市	西都市 提供	-	-	-
5	コスモス	写真	西都市	西都市 提供	-	-	-
5	考古博物館からの眺め	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
5	西都原考古博物館（1）	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
5	西都原考古博物館（2）	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
■上野公園							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
6	鏡写真／大噴水	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
6	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	-	2007
6	名所江戸百景 上野清水堂不忍	絵図	歌川広重 画	江戸東京博物館提供	-	-	1856
7	地形図	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.10の図）」を元に、加筆・着色・トレース	-	-	2007
7	地形断面図	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.10の図）」を元に、加筆・着色・トレース	-	-	2007
7	江戸不忍弁天刎東叡山ヲ見ル図	絵図	溪斎英泉 画	「国立国会図書館ホームページ 貴重書画像データベース」 (http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_com_menu.jsp)	-	-	1820～ 1850
7	不忍池	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
8	東京上野公園地実測図	図	内務省地理局	「国立公文書館ホームページ デジタルアーカイブス」よりダウンロードした画像データを元に、加筆	-	-	1878
9	東叡山絵図	図	国土技術政策総合研究所	「首都大学東京図書館情報センターホームページ」よりダウンロードした、「水野家文書 東叡山絵図」を元に、加筆・トレース	-	-	2007
9	上野公園の変遷	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.59）」の図を元に、トレース	-	-	2007
■砧公園							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
10	鏡写真／入口	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
10	芝生広場	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
10	谷戸川	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
10	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	-	2007
11	東京緑地計画環状緑地計画図	図	国土技術政策総合研究所	「公園緑地（第3巻 第2・3合併号）」の図を元に、加筆・着色・ト	-	-	2007
12	砧公園平面図	図	国土技術政策総合研究所	「砧公園パンフレット」の図を元に、加筆・着色・トレース	-	-	2007
12	芝生広場	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
13	水元公園平面図	図	国土技術政策総合研究所	「東京都建設局 水元公園公式ホームページ」からダウンロードしたデータを元に、加筆・着色・トレース	-	-	2007
13	水元公園	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007
13	水元公園	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	-	2007

■アルテピアッツァ美唄					
掲載頁	写真・図	作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
14	鏡写真／水の広場	写真 松井幹雄	-	-	2002
14	鳥瞰写真（現在）	写真 北海道新聞社	「安田侃の芸術広場 アルテピアッツァ美唄」(P.116)	北海道新聞社	2002
14	鳥瞰写真（昭和30年頃）	写真 美唄市	「安田侃の芸術広場 アルテピアッツァ美唄」(P.8)	北海道新聞社	1955頃
14	位置図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007
15	整備中の様子①	写真 美唄市	美唄市 提供	-	-
15	整備中の様子②	写真 美唄市	美唄市 提供	-	-
15	水の広場 平面図	図 国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	-	2007
15	池 断面図	図 国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	-	2007
15	水の広場	写真 松井幹雄	-	-	2002
15	池	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
16	現場の安田氏	写真 美唄市	美唄市 提供	-	-
16	天翔の丘 頂上部	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
16	天翔の丘 園路	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
16	天翔の丘からの眺め	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
16	天翔の丘 平面図	図 国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	-	2007
17	木造校舎の写真	写真 松井幹雄	-	-	2002
17	ギャラリー内部	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
17	彫刻と子供たち	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
17	アートのスペース内	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
■古河総合公園					
掲載頁	写真・図	作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
18	鏡写真／現在の御所沼	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
18	明治時代の古河の地図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院 明治前期測量1/20000フランス式彩色地図を元に、加筆・トレース	-	2007
18	位置図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007
19	鳥瞰写真(1972年)	写真 古河市	古河市 提供	-	1972
19	鳥瞰写真(2000年)	写真 古河市	古河市 提供	-	2000
19	御所沼復元の手順	図 国土技術政策総合研究所	古河市より入手した、中村良夫氏が作成した図面を元に、着色・トレース	-	2007
20	天神橋	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
20	風景のためのデッサン	絵図 中村良夫	古河市 提供	-	-
20	古河総合公園 平面図	図 国土技術政策総合研究所	古河市より入手した図面を元に、加筆	-	2007
21	新久田道	写真 古河市	古河市 提供	-	-
21	御手洗池	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
21	星湖釣殿	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
21	筑波山の眺望	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007
21	ジェラテリア	写真 古河市	古河市 提供	-	-
21	田植えの様子	写真 古河市	古河市 提供	-	-
21	茶摘みの様子	写真 古河市	古河市 提供	-	-

■モエレ沼公園						
掲載頁	写真・図	作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次	
22	鏡写真／鳥瞰	写真 (財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	-	-	
22	鳥瞰写真 (ゴミ処理場当時)	写真 (財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	-	-	
22	イサムノグチの視察	写真 (財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	-	-	
22	位置図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を基に加筆・トレース	-	2007	
23	全体平面図	図 札幌市	「モエレ沼公園図面集(図面名：位置図)」	札幌市	1996	
23	模型写真	写真 (財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	-	-	
24	プレイマウンテン平面図	図 国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
24	テトラマウンド立面図	図 国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
24	プレイマウンテン	写真 松井幹雄	-	-	2002	
24	テトラマウンド	写真 松井幹雄	-	-	2002	
24	プレイマウンテン園路	写真 松井幹雄	-	-	2002	
25	モエレ山平面図	図 国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
25	モエレ山断面図	図 国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
25	土層断面図	図 (財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	-	2007	
25	モエレ山	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
■長崎水辺の森公園						
掲載頁	写真・図	作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次	
26	鏡写真／メインゲートからの眺望	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
26	鳥瞰写真	写真 長崎県	「環長崎港アーバンデザインシステム【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007	
26	位置図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007	
27	全体平面図	図 長崎県	「長崎水辺の森公園 パンフレット」	長崎県	-	
27	3つの軸と2重螺旋軸	図 長崎県	「環長崎港アーバンデザインシステム【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007	
28	「水辺のプロムナド」水路沿い断面図	図 国土技術政策総合研究所	長崎漁港港湾事務所より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
28	「水の庭園」水路沿い断面図	図 国土技術政策総合研究所	長崎漁港港湾事務所より入手した図面を元に、トレース	-	2007	
28	「水辺のプロムナド」の園路	写真 松井幹雄	-	-	2002	
28	「水の庭園」の護岸	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
28	「水の庭園」の救命浮き輪	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
28-29	断面位置図・橋梁位置図	図 国土技術政策総合研究所	「長崎水辺の森公園パンフレット(長崎県)」の平面図を元に、加筆	-	2007	
29	橋梁(7種類)	写真 長崎県	「環長崎港アーバンデザインシステム【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007	
29	メインゲートのライトアップ	写真 株式会社石井幹子デザイン事務所	株式会社石井幹子デザイン事務所 提供	-	-	
■震災復興小公園						
掲載頁	写真・図	作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次	
30	鏡写真／元町公園入口	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
30	位置図	図 国土技術政策総合研究所	国土地理院1/25000地形図(縮小使用)、「東京市復興公園概要(1931年、旧東京市役所)」、「東京市復興計画三千分一大地図(1924年、内山模型製図社)」を元に、加筆・トレース	-	2007	
31	上六公園 鳥瞰図	図 (旧)東京市	「上六公園案内」(東京都中央図書館所蔵)	-	1929	
31	上六公園 現況写真	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
31	南桜公園 鳥瞰図	図 (旧)東京市	「南桜公園案内」(東京都中央図書館所蔵)	-	1929	
31	南桜公園 現況写真	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	
31	元町公園 鳥瞰図	図 (旧)東京市	「元町公園案内」(東京都中央図書館所蔵)	-	1930頃	
31	元町公園周辺図	図 国土技術政策総合研究所	「元町公園案内(1930年代、旧東京市役所)」、「東京市教育施設復興図集(1932年、旧東京市役所)」を元に、加筆・着色・トレース	-	2007	
31	現況写真(元町公園)	写真 国土技術政策総合研究所	-	-	2007	

■多摩ニュータウン・港北ニュータウン							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
32	鏡写真	多摩NT 落合・鶴牧	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	-	-
32	鏡写真	多摩NT 稲城向陽台	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	-	-
32	鏡写真	港北NT 鴨池公園	写真	独立行政法人都市再生機構	「港北ニュータウン パンフレット」	独立行政法人都市再生機構	2000
32	位置図	(多摩NT・港北NT)	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/200000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007
33		基幹空間構成の概念図	図	国土技術政策総合研究所	「オープンスペース 環境施設計画資料集 (1997年9月、南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会編、P.61の図)」を元に、着色・トレース	-	2007
33		公園緑地等の配置計画図	図	国土技術政策総合研究所	「オープンスペース 環境施設計画資料集 (1997年9月、南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会編、P.60の図)」を元に、着色・トレース	-	2007
33		富士見通りからの富士山の眺望	写真	金井一郎	-	-	-
34		地域環境構造図	図	国土技術政策総合研究所	松崎 喬氏作成図面を元に、着色・トレース	-	2007
34		オープンスペース計画基本構想	図	松崎 喬	-	-	2007
34		尾根地形の保全	図	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	-	-
34		生活環境軸	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
35		グリーンマトリックスシステム概念図	図	独立行政法人都市再生機構	「港北ニュータウン パンフレット」	独立行政法人都市再生機構	2000
35		グリーンマトリックスシステム断面図	図	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	-	-
35		具体的な緑の保存	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	-	-
35		せせらぎ公園	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
35		緑道	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
■大清水空間							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
36	鏡写真	大清水広場	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2005
36		勝山の家並み	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2003
36	位置図		図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007
37		ワークショップの様子	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
37		全体計画図	図	小野寺康都市設計事務所	-	-	2003
38		大清水周辺 平面図	図	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
38		大清水水路 断面図	図	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
38		大清水水路部 (2種類)	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2005
38		源泉部広場 模型	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
38		源泉部広場 スケッチ	絵図	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
39		源泉部広場 平面図	図	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
39		整備後の源泉部広場	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2005
39		整備前・後の大清水広場	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2003・2005
39		大清水広場 模型	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2004
39		整備前・後の路地空間	写真	小野寺康都市設計事務所	-	-	2003・2005
■児ノ口公園							
掲載頁	写真・図		作成者・撮影者		出典	編著者・出版元等	年次
40	鏡写真	五六川	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
40		植樹会の写真	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
40	位置図		図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	-	2007
41	平面図		図	国土技術政策総合研究所	「児ノ口公園パンフレット」を元に、加筆・着色・トレース	-	2007
42		1947空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真 (1947) を元に、加筆	-	1947
42		1987空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真 (1987) を元に、加筆	-	1987
42		2000空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真 (2000) を元に、加筆	-	2000
43		道路との境界付近	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
43		道路からの眺望	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007
43		園内の様子 (たんぼ・ちごの庵)	写真	国土技術政策総合研究所	-	-	2007